郡上白山文化における御師の歴史的役割の研究
～石徹白地域における御師と現代における観光との繋がり～

目次

はじめに
第１章　緒　言
　　１．目的並びに問題の所在
　　２．郡上白山文化と御師の歴史的背景
　　３．石徹白地域における白山文化遺産
　　４．御師に関するオーラルヒストリー
　　５．御師の果たした役割
　　６．信仰と観光のつながり

第２章　郡上白山文化遺産デジタルアーカイブ
　　１．石徹白地域における白山文化遺産について
　　２．石徹白地域に残る資料のデジタルアーカイブ
　　３．資料集より

第３章　御師のオーラルヒストリーからみる役割
　　１．いとしろ白山御師資料集について
　　２．上村氏のインタビューについて
　　３．水上氏のオーラルヒストリー

第４章　結言
　　１．御師の果たした役割について
　　２．現代における観光とのつながりについて

参考資料

参考文献

第一章 緒　言

1. 問題の所在

地域の文化を学ぼうとする時、その地に祀られている神社や寺院が多くのことを教えてくれる。岐阜県は、全国で一番多く白山神社が存在している。そのために、白山文化を織ることは岐阜県の文化を織ることともいえる。

白山信仰とは、加賀国、 越前国、美濃国 （現 石川県、福井県、岐阜県）にまたがる白山に関わる山岳信仰である。古くから白山は、富士、立山とならび「日本三名山」のひとつに数えられる秀麗な峰であった。また白山から流れ出る豊富な水は四方の川を満たし、それが広く田畑を潤すお蔭で、人々の生活と農事の一切が成り立っていた。このため、古代より白山は「命をつなぐ親神様」として、水神や農業神として、山そのものを神体とする原始的な山岳信仰の対象となり、白山を水源とする九頭竜川、手取川、長良川流域を中心に崇められていた。奈良時代になると修験者が信仰対象の山岳を修験の霊山として日本各地で開山するようになり、白山においても、泰澄が登頂して開山が行われ、原始的だった白山信仰は修験道として体系化されて、「白山信仰」が成立することとなった。（ウィキペディアより）

しかし、何故白山神社は日本全国に二千七百社も祀られているのであろうか。その陰には、御師（おし）と呼ばれた方々の先人の努力があったと考えられる。御師とは、特定の社寺に所属して、その社寺へ参詣者、信者の為に祈祷、案内をし、参拝・宿泊などの世話をする神職のことである。御師については熊野御師や伊勢御師が有名ではあるが、白山にも御師が存在したと石徹白に残る白山御師檀那場巡回帳等に記録されている。しかし、白山登拝の入り口である三馬場のうち、越前馬場、加賀馬場では詳細な御師の記録は見当たらない。また美濃馬場においても、御師の記録がなくなってきており、このままであれば御師の活動そのものが不明になる寸前である状況である。

そこで、これらの御師の記録資料をデジタルアーカイブするとともに、御師の活動について地域の方のオーラルヒストリー等を作成し、記録資料を分析、その結果として、御師は何を持ってどのように白山信仰を全国に広めていったのか。特に石徹白の白山御師の果たした役割とは何かについて明らかにすることが目的である。また現在における観光とのつながりについても考察する。

２．郡上白山文化と御師の歴史的背景

奈良時代になると我が国古来の山岳信仰に、外来の道教、仏教とくに密教の影響が見られるようになる。白山もその姿から、古くから山岳信仰の霊山として仰がれてきた。白山への禅定道は、加賀・越前・美濃の三方に馬場という白山登拝の拠点が開かれた。美濃禅定道にも、宿とよばれる行場や社がいくつかあり、白山への道は一般信者の登拝道と修験者たちが登る行者道に分かれていたようである。

美濃禅定道の石徹白（いとしろ）は、薬草や護符を配布して白山信仰を広めた御師の集落である。奈良時代に起源をもつ白山信仰の重要な宗教拠点として、かつては村人すべてが神に仕えた「御師の里」である。農閑期に諸国を旅し、白山信仰を全国に広げた御師の働きもあって、美濃馬場は「上り千人、下り千人」と称されるほど隆盛を極めました。

石徹白白山御師の場合、夏は登拝信者の先達として山の案内や宿坊を提供し、年末降雪期から春頃までは檀那場を回った。白山先達の力が衰えた江戸時代になっても、檀那場を一回りしてくると、金 50 両、米 50 俵などの寄進があったこともあるという。石徹白地区は雪深い里であり、御師活動による収入は得難い財源であったようである。主に白山薬草、雷除けの護符・牛王札や白山道略図を配布して歩いた。これにはもちろん礼金がともなうので、一巡りすると多くの金品寄進が得られることにつながった。

３．石徹白地域における白山文化遺産について

郡上白山文化遺産デジタルアーカイブから、石徹白地域に関する白山文化遺産を抽出し記録する。また可能であれば現地に行き撮影を行う。まずは石徹白地域における白山信仰の役割や歴史を踏まえる。

① 石徹白地域に残る資料のデジタルアーカイブ

近代における石徹白白山御師の家は５軒あり、可能であれば資料の確認及び撮影を行う。（石徹白彦右衛門家、石徹白愛之助家、杉本家、上杉家、上村家）

御師に関する衣装や持ち物、資料の確認及び撮影を行う。特に檀那場に関する巡廻帳や白山登拝絵図があれば、記録として残したい。※石徹白清住家文書「定札配札帳」

② 郡上白山文化遺産デジタルアーカイブ

資料集より関連資料等抽出し掲載する。

４．御師のオーラルヒストリー

檀那場を探訪された水上氏のオーラルヒストリー

　平成２３年から２７年までの４年間に上村氏と水上氏は、檀那場を現地調査する等全国各地を探訪された。その場所毎に関係者に会って話を聞いたという。上村氏は高齢のためオーラルヒストリーを実施するのは難しい状況であった。そこで一緒に探訪された水上氏に協力いただきながら、オーラルヒストリーを行い、御師の果たした役割等を聞く。

５．御師の果たした役割について

６．信仰と観光のつながり

第２章　郡上白山文化遺産デジタルアーカイブ

１．石徹白地域における白山文化遺産について

郡上白山文化遺産デジタルアーカイブから、石徹白地域に関する白山文化遺産を抽出し記録する。また可能であれば現地に行き撮影を行う。まずは石徹白地域における白山信仰の役割や歴史を踏まえる。

２．石徹白地区に残る資料のデジタルアーカイブ

近代における石徹白白山御師の家は５軒あり、可能であれば資料の確認及び撮影を行う。

（石徹白彦右衛門家、石徹白愛之助家、杉本家、上杉家、上村家）

※各家に残る個別の檀那場諸祈願巡廻帳等

①<u>石徹白風景</u>

②<u>石徹白地区調査　中間報告会</u>

③石徹白地区調査　結果報告会

④昔と今の石徹白

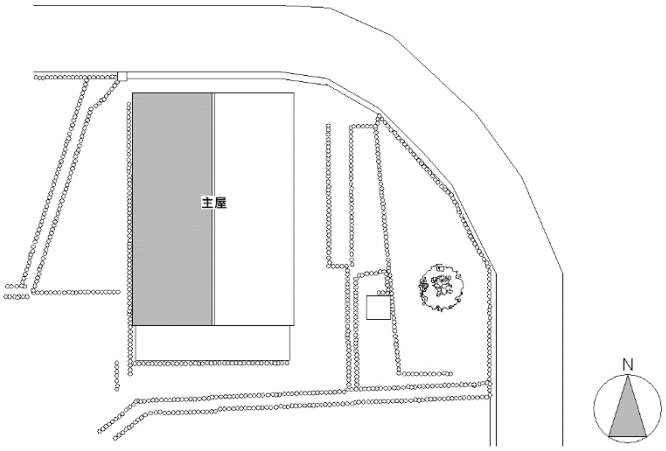
くれ板葺きの民家

ブナの原生林

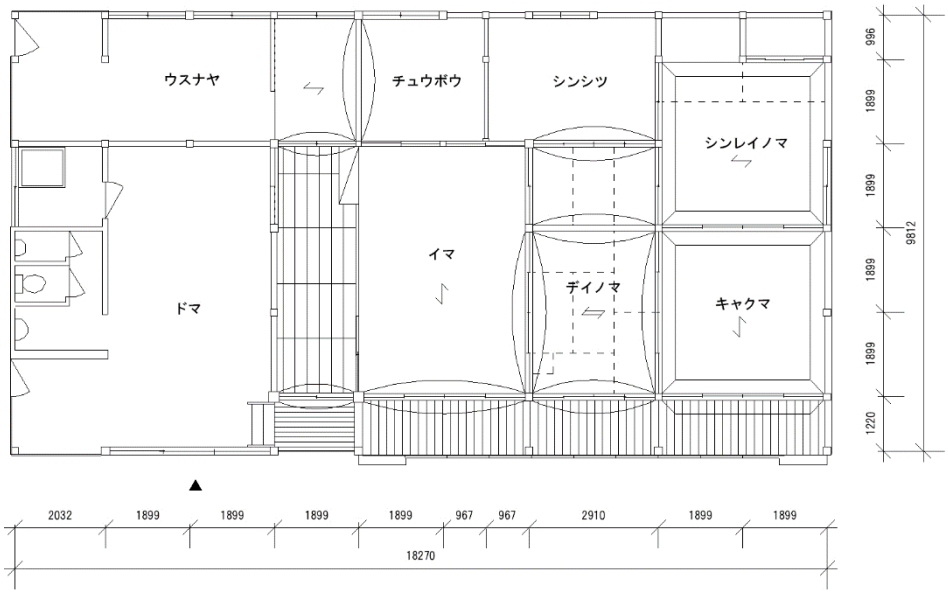
浦安の舞

御師の家

石徹白伊織家　図面１

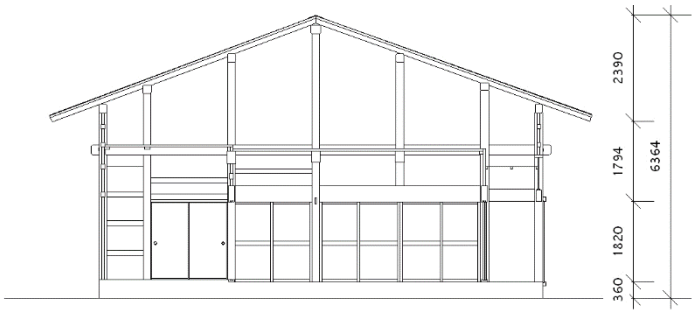


配置図　S=1:500

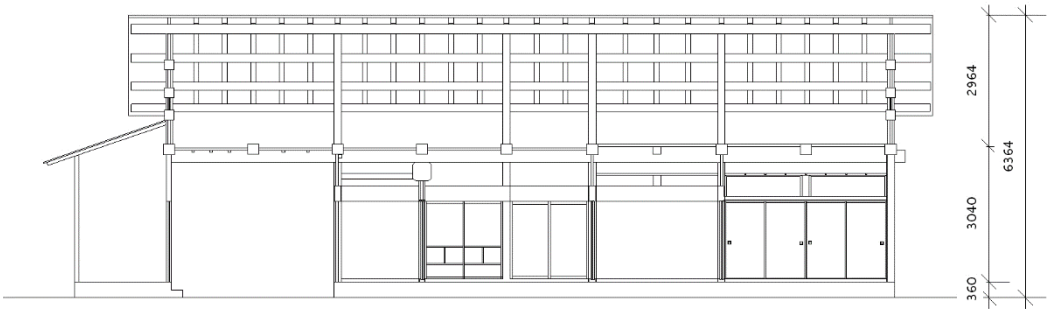


平面図　S=1:150

石徹白伊織家　図面 2



梁間断面図　S=1:150



桁行断面図　S=1:150

上ハ野の一本杉（解説）

西在所の風景

大師堂あたりの中在所集落

中在所の風景

白山中居神社

３．資料集より

＜岐阜女子大学郡上白山文化遺産デジタルアーカイブ　資料集より＞

１．白山信仰

白山

白山は、岐阜県、福井県、石川県、富山県の４県にまたがる山で、富士山、立山とともに日本三名山といわれることがあります。白山は主峰を持たない山で、御前峰（ごぜんがみね）（2,702 メート

ル)、大汝峰（2,684 メートル)、剣ケ峰（2,677 メートル）の３つの峰からなります。ここに別山も含めて、ひろく白山と総称することもあります。古来は「しらやま」と呼ばれていたようです。

白山には貴重な植物が多く、「ハクサンコザクラ」「ハクサンイチゲ」など白山の名前を冠する植物も 18 種類あります。昭和 37 年(1962)に白山国立公園に指定されたのに続き、森林生態系保護地域、カモシカ保護地域にも指定されています。国際的にもユネスコの生物圏保存地域に指定されるなど、国際的にも高い評価がされているといえます。

白山信仰のはじまり

一年中雪を頂き、長良川（岐阜県)、九頭竜川（福井県)、手取川（石川県)、庄川（富山県）の水源となる白山は、古来から人びとの崇拝の対象であったと考えられます。

白山信仰は、御前峰には伊弉冉尊（別称・白山妙理大菩薩。本地仏は十一面観音で白山妙理大権現ともいう。)、大汝峰には大己貴尊（本地仏は阿弥陀如来)、別山には小白山別山大行事（本地仏は聖観音）がましますとされる、白山三所権現の考え方を基礎とし、神仏習合の山岳信仰として発展しました。養老元年（717）に、越の国（現在の福井市）の僧・泰澄が白山を開いたことに始まるとされています。※本地仏神は、仏や菩薩が人間を救うために仮の姿で現れたものという考え方に基づき、本来の姿である仏や菩薩のことを本地仏といいます。

馬場と禅定道

白山信仰が確立していく中で、天長９年（832）には、馬場と禅定道が整えられたとされます。 馬場とは、白山を遥拝する場所のことで、この馬場から白山への登拝路のことを禅定道といいます。美濃の白山本地中宮長滝寺（現・長滝白山神社/長瀧寺、郡上市白鳥町長滝)、越前の白山中宮平泉寺（現・平泉寺白山神社、福井県勝山市)、加賀の白山本宮白山寺（現・白山比咩神社、石川県白山市）の３つの馬場と、この馬場からそれぞれに白山へ登拝する禅定道（美濃禅定道、越前禅定道、加賀禅定道）がありました。

白山信仰の歴史

白山を開いたとされる僧・泰澄が、聖武天皇の病気を平癒したり、伝染病の流行を治めたりしたことで、白山も広く諸国からの崇敬を集めたと伝えられます。 平安時代初期から、天台・真言宗の力が増すとともに、天長５年（828）に長滝寺がいちはやく天台宗比叡山延暦寺の末寺となったことに続き、ほかの馬場が置かれた平泉寺、白山寺も延暦寺の末寺となっていきます。 平安時代中期以降は、山岳修験道の母胎として、諸国から多くの信者が白山へ登拝するとともに、時の権力者たちも信仰を寄せ、白山信仰は隆盛期を迎えます。 鎌倉・室町時代を境に、諸国の政情不安により徐々に白山神の威光は最盛期の力を失ってゆくものの、江戸時代には藩主から寄進を受けるなど、人びとの信仰を集めていました。

しかし、明治元年（1868）に明治政府が出した「神仏判然令」は神仏分離を命じたもので、神仏混淆の白山信仰は大きな影響を受けました。

２．美濃馬場と禅定道

美濃馬場・白山本地中宮長滝寺の歩み

現在の郡上市白鳥町長滝におかれた美濃馬場（ばんば）・白山本地中宮長滝寺は、養老元年（717）に越の国（現在の福井市）の僧・泰澄が白山中宮を創建したことに始まるとされます。その後、天平２年（730）に元正天皇が、本地十一面観音、聖観音、阿弥陀如来の三像を奉納したことから、白山本地中宮長滝寺と称するようになったと伝えられます。

長滝寺は、天長５年（828）に、法相宗から天台宗に改宗し、近国における総本山として勢力を増し、同寺の周辺には「６谷６院３６０坊」といわれるほどの塔頭や宿坊が立ち並んだと伝えられます。治安元年（1021）には後一条天皇の勅命で国家鎮護の祈祷をし、天台別院という高い格式を得ました。

美濃側からの白山への登拝拠点として、尾張・駿河方面からの登拝者たちを迎えたとされます。また、藤原秀衡が鐘楼を寄進したこと、足利尊氏が祈祷を依頼したことなどが記録されており、その時代の権力者の信仰も集めていたと推測されます。

明治元年（1868）の神仏分離令により、白山本地中宮長滝寺は、神を祀る長滝白山神社と、仏を祀る長瀧寺の２つに分離されました。 明治 32 年（1899）には、濃州第一とうたわれた社殿仏閣は灰燼に帰しましたが、国指定重要文化財の釈迦三尊像などかつての白山信仰の栄華を伝える宝物等が今に伝えられ、一部は龍宝殿や白山文化博物館で公開されています。

美濃禅定道

馬場（ばんば）から白山への登拝路のことを禅定道（ぜんじょうどう）といいますが、美濃馬場を起点にする禅定道を美濃禅定道といいます。 美濃禅定道は、白山本地中宮長滝寺を起点に、床並とこなみ社、桧峠を越え、白山中居神社へ。その後、美女下社、今冷泉いましみず社、石徹白大スギ、神鳩（かんばと）社から銚子ケ峰、一ノ峰、ニノ峰、三ノ峰、南竜ケ馬場、別山を経て白山へ至る道のことで、一般の登拝者が登った道だと伝えられます。

行者（山伏や修験者たち）が通った行者道は、白山本地中宮長滝寺から、一ノ宿、二ノ宿、三ノ宿、多和宿、国坂、泉ノ宿、中須、大日宿、カウハシを経て神鳩宿で禅定道と合流しました。 美濃禅定道は、３つの禅定道の中で最も登拝者が多かった道だとされます。

その盛況さを示す言葉として「のぼり千人、くだり千人、ふもと千人」があります。史料からは、実際の登拝者はもっと少なかったと推測されますが、この道が、美濃・尾張方面からの多くの登拝者たちで賑わったことを思い起こさせます。

白山信仰の衰退とともに、美濃禅定道も荒廃しましたが、一部が復元されています。

３．石徹白と白山信仰

石徹白

石徹白地区は、郡上市白鳥町に位置し、白山連峰に源を発した石徹白川に沿った集落です。人口は 316 人（平成 17 年度国勢調査）、地区内は、上在所、西在所、中在所、下在所の４地域にわかれ、いずれも標高約 700 メートル以上の高地にあります。 石徹白という地名の由来は、「いしどうしろ」から転じて「いとしろ」となったとする説など、諸説あります。

地区内の寺社は、白山中居神社、安養寺道場、白鳥山威徳寺、雷鳥山円周寺です。地区内の文化財は、国指定特別天然記念物「石徹白の大スギ」、国指定重要文化財「銅像虚空像菩薩坐像」、県指定重要文化財「白山中居神社の彫刻」県指定天然記念物「浄安スギ」のほか、県指定文化財７件、市指定文化財８件があります。

石徹白地区の歴史

石徹白地区からは、縄文式土器や石器類が発掘されており、古くからから人びとが生活をしていたものと推測されます。 養老元年(717)に僧・泰澄が白山を開いた際に、石徹白地区の白山中居神社の社域を拡張し、社殿を修復したと伝えられます。

石徹白地区は、全域が、この白山中居神社の神領でした。人びとは、社家・社人と呼ばれ、それぞれに白山中居神社と関わりあいながら暮らしました。神領ということから、無税（税金が免除）で、名字を名乗ること、帯刀を指すことが許されていました。

また、無主無従で、いわゆる大名領になったことはほとんどありません。石徹白地区の主要な出来事は、オトナ（頭社人）と呼ばれる 12 人の人びとの合議によって決められました。このような石徹白地区で、江戸時代中期の宝暦年間には、真宗道場威徳寺の昇格を発端とし、白山中居神社の神職間の対立関係が原因の「石徹白騒動」が、明治初年には新政府の神仏分離令に端を発する神仏分離騒動が、そして昭和 30 年代初期には越県合併問題という、石徹白地区内を２分するような騒動が３度起きています。

社家・社人

石徹白地区の中でも、白山中居神社がある上在所の人は社家とよばれ、そのほかの在所の人びとは社人といわれました。また、小谷堂・三面集落の人びとは、末社人と呼ばれました。社家は、神に仕えることを本職とし、神頭、神主、幣司、神楽司等として、白山中居神社の神事・祭礼をつかさどりました。 社人は、平常は百姓をしていながら、白山中居神社の祭事のときに奉仕した人びとのことで、同社の維持管理を担いました。

社家・社人たちの暮らしと白山信仰

「木山三里、笹山三里、はげ山三里」といわれた白山への長い禅定道では、登拝者たちに先達（案内人）は欠かせないものでした。行者（修験者・山伏等）以外の登拝者たちは、石徹

白地区で１泊した後、銚子ケ峰、別山を経て白山を目指したとされます。

こうした登拝者たちの宿坊を営み、祈祷をし、登拝者たちの案内人をしたのが御師と呼ばれる人びとです。冬場は、白山神の羽織袴に帯刀を指し、雷除けの護符に牛王札、白山の薬草、白山略図を持って、各地の檀那場を回り、白山信仰を広めました。檀那場を一回りすると金 50 両・米 50 俵などの寄進があったともいわれます。

御師は、上在所の社家がなりました。社家は、神に仕えることを本職としたので、御師としての収入が、生活の支えでした。 一方で、平常は百姓として田畑を耕作していた社人たちは、石徹白地区が白山中居神社の神領として無税であったことから、収穫物は全て自分のものとなりました。 社家は、御師として、社人は、神領ゆえ無税という恩恵を受けながら、白山信仰の中で生活をしていました。

４．石徹白を２分する騒動 ～ 石徹白騒動と神仏分離騒動 ～

石徹白騒動

江戸時代の半ば、宝暦年間に、石徹白地区では「石徹白騒動」と呼ばれる事件が起きました。 騒動の発端は、宝暦２年(1752)に、真宗高山照蓮寺の道場・威徳寺の６代目看坊・恵俊が、本山に対し、高山照蓮寺の掛所への昇格を願い出たことにあります。恵俊は、石徹白の人びとは全て異存がないと偽りを言い、昇格を願い出ました。

ところが、恵俊の偽りを見破った白山中居神社の神主・石徹白豊前は、京都へ向かい、本山に対しては強烈な抗議を申し入れ、神道の本家・吉田家に対しては、吉田家の力でもって郡上藩寺社奉行に、恵俊の偽りを吟味するよう指図してほしいと頼みました。

石徹白豊前の願いは聞き届けられ、郡上藩寺社奉行からは、神道の本家・吉田家の厳命によるものだとして、「今後は何事によらず石徹白豊前に従うように」との命令書をもらいます。しかし、石徹白の人びとは、我々は神道の本家・白川家の門弟であるとし、吉田家の命令には従えないと拒否します。結果、こう着状態となり、この一件は棚上げにされました。

宝暦４年（1754）になると、石徹白豊前は、再び京都の吉田家を訪れます。このとき、吉田家から「吉田家の命令に従わないものは神職を免ずる」という一筆をもらいます。石徹白豊前は、これを「吉田家の命令に従わないものは追放する」と拡大解釈し、横暴な行動に出るようになります。 まず、先の恵俊の一件のときに自分の悪口を言い恥をかかせた治郎兵衛を、吉田家の命令だというだけで追放・欠所にします。また、「自分の支配を受けるように、従わない場合は神職を取り上げ百姓にする」と石徹白の人びとを脅迫します。一方で、石徹白豊前は、白山中居神社の用材を伐り出す造営山や、他人の持山にまで手を伸ばし、勝手に伐木するようになりました。

石徹白豊前の横暴に堪りかねた石徹白の人びとは、郡上藩寺社奉行へ訴え出ますが、とりあってもらえなかったため、江戸の寺社奉行へ越訴します。しかし江戸の寺社奉行も、郡上藩主と親戚であったため、内密に処理されました。訴え出た人びとは、手錠をかけられ、後

に追放処分されます。 郡上藩寺社奉行は、石徹白の人びとに対し、いまいちど「石徹白豊前の命令にしたがうように」と迫ります。拒否した老幼男女 500 余人は、欠所の上、飛騨・白川村への追放処分にされます。この中には、降る雪の中を着の身着のまま、素足で追い出された者もいました。路頭に迷い情けにすがるしかない中で、72 名の餓死者が出ました。当時の石徹白の約２／３の人びとがいなくなった石徹白では、石徹白豊前の横暴はますますひどくなったといわれます。 宝暦６年（1756）、追放された石徹白の人びとが連絡を取り合い、再度、江戸への訴訟を計画します。老中が登城するのを待ち構え、籠にむかって訴えました。訴状は受理され、江戸の寺社奉行の元で吟味が始まったものの、遅々として進みません。たまりかね、江戸の寺社奉行へ訴訟するものの、事態は変わりません。 宝暦８年（1757）には、目安箱への箱訴を決行します。３度目の箱訴でようやく取り上げられ、幕府評定所の吟味が始まります。 同年１２月には判決が申し渡されます。郡上藩主・金森家は、同じ頃に起きた宝暦騒動（郡上一揆）と本騒動の責任を問われ、領地没収、断絶処分にされました。

郡上藩寺社奉行は死刑相当とされました（牢内で病死）。石徹白豊前も同じく死刑を言い渡されました。一方で、籠訴や箱訴を行なった人びとへは、ほとんど無罪に近い軽い処分だけで済みました。 こうして石徹白騒動は決着をみます。江戸時代には、多くの民衆運動が起きましたが、神職が深く関わった騒動は、白山中居神社の神領であった石徹白地区ならではの特徴です。

明治の神仏分離騒動

明治元年（1868）、明治政府が神仏分離令を出しました。白山信仰は神仏混淆（こんこう）であり、石徹白地区の人びとは社家・社人として、神と仏の両方を自然に尊び生活をしてきたので、大きな混乱をもたらしました。 石徹白地区は、「石徹白騒動」の起きた江戸時代中期あたりまでは、社家・社人とも神道一色の地域でした。しかし、いつからか真宗信者も増え、社人であっても仏教の形式による葬儀を行うものが多くなりました。

社家たちは、明治２年（1869）、いちはやく白山中居神社の神職であることを政府に求め、翌年にかけて、この地域は神地であり、住民は社家・社人のみで百姓は１人もおらず、神葬祭（しんそうさい）を行なう地域である、また無税の特典を引き続き与えられ神事に専念させてもらいたい、という運動を展開します。これが成功すれば、石徹白地区全域は今までのように白山中居神社の神領で、社家・社人の自治体制が維持できると考えた社家は、社人でありながら仏教徒である門徒社人たちに対し、「社家・社人たるものは神葬祭によるべし」との指令をだします。社家は、また、白山中居神社が古来から純粋な神社であると政府に認めさせるため、白山中居神社の社殿内から仏体、仏具などを取り出し、ひそかに処分しました。

こうしたことに大いに憤慨した門徒社人たちは、泰澄（たいちょう）大師以来の信仰があるから白山中居神社への奉仕は続ける、しかし、神葬祭は社家だけに限り、門徒社人へは今まで通りの仏教を認めてもらいたい、という運動を起こすことになりました。しかし、門徒社人が頼りとした本山（本願寺）も、神道国教策をとる明治政府への対応に腐心し、門徒社人たちの訴えに

応ずる余裕はありませんでした。

明治３年（1870）、門徒社人たちは郡上役所へ数回に亘って訴えました。神仏分離はもっともなことであるから、以後は、われわれは社人ではなく百姓の身分になる、という内容のものでした。従来まで白山中居神社の神領としての無税の特権を失うことでしたが、それも覚悟の上だったようです。

この願いに対し、政府も、「社人希望のものは社人に、帰農をのぞむものは帰農を許可する。今後は社人と百姓を区別せよ。また、上在所は清浄の地であるから仏堂、仏具などは取り除き、仏体、仏具は帰農するものへ渡せ。土地も明確に区分せよ。」と命じました。

明治４年（1871）、帰農した社人たちは、ようやく社家から渡された仏体（釈迦如来、薬師如来、虚空像菩薩、泰澄坐像など）や鰐口などを、中在所に観音堂を営み、納めました。現在、大師堂と通称されるお堂で、虚空像菩薩は後に、国指定重要文化財に指定された銅造虚空像菩薩坐像です。

５．越県合併といまの石徹白

越県合併

昭和 28 年（1953）、町村合併促進法が制定され、全国で町村合併が進みました。福井県大野郡に属していた石徹白村は、独立村を目指すものの認められず、同郡上穴馬村・下穴馬村との合併協議も不調に終ったので、岐阜県郡上郡白鳥町との越県合併が協議されました。石徹白村内では賛成派と反対派にわかれ協議が行なわれた結果、昭和 31 年（1956）、白鳥町と石徹白村の両町村合同会議において、満場一致で両町村合併が議決されました。

しかし、この後も、賛成派と反対派の対立は続き、両県の職員や県会議員等を巻き込んでの活発な運動が展開されました。あくまで石徹白村の越県合併に反対する福井県は、合併の法定期日を過ぎても合併議決を行なわなかったため、内閣総理大臣の裁定を受けることとなりました。 昭和 33 年（1958）３月、新市町村建設中央審議会小委員会が、総理大臣あてに、石徹白の越県合併を認める答申を出します。そして９月になりようやく、石徹白村を白鳥町へ編入する処分が総理大臣によりなされます。 こうして５年の歳月を経て、石徹白村と白鳥町の越県合併は実現し、10 月 15 日新しい白鳥町が誕生しました。

※ 合併前の石徹白村の内、上在所・西在所・中在所・下在所集落は白鳥町と合併、小谷堂（こたんどう）・三面（さつら）集落は上穴馬・下穴馬と合併しました。

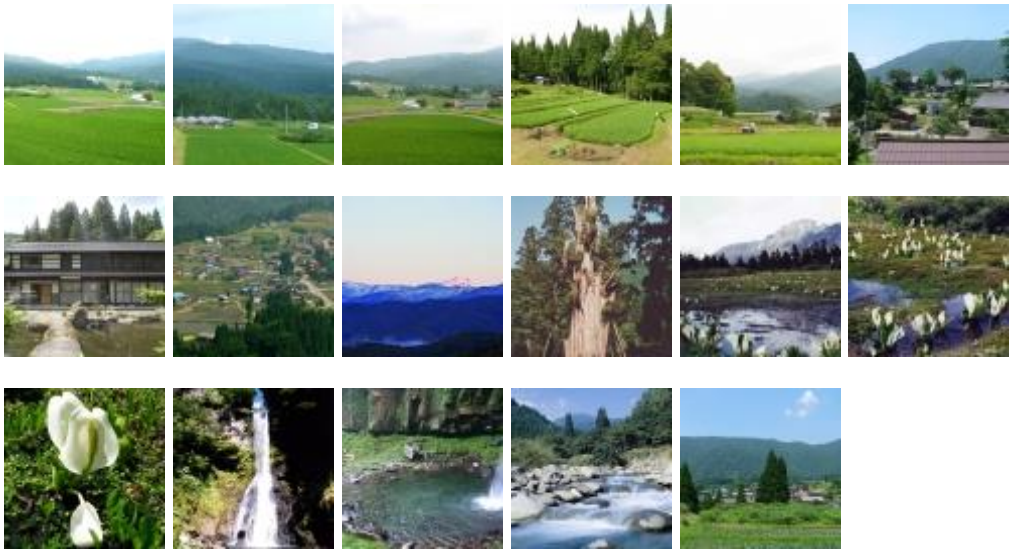
いまの石徹白

「岐阜県郡上市白鳥町石徹白」、これが現在の石徹白地区の地名です。平成 16 年３月１日に、郡上郡７町村が合併し、郡上市が誕生しました。石徹白地区は、半世紀の間に２度の合併を経験していることになります。 そんないまの石徹白地区については、渓流釣りやスキー場、スイートコーンやほうれん草、あるいは、国指定特別天然記念物・石徹白大スギ等に

代表される豊かな自然のイメージを持たれる方が多いのではないでしょうか。
しかし、石徹白地区内を縦断する県道に沿い、上在所へ入る手前に、しめ縄が飾られています。これは、しめ縄以北の上在所は、神道の地域であるという印で、明治の神仏分離令以降、飾られるようになったものです。また、地区内には、白山を開いたとされる僧・泰澄にちなむ伝承が残る場所が、たくさんあります。
石徹白地区は長い歳月を、白山信仰と共にありました。ですから、石徹白地区の歴史や生活文化、年中行事等は、白山信仰の影響を受けながら作られ、変化し、現在の形になっているものと考えられます。こうした、白山信仰との関係の中で培われた石徹白地区の歴史や文化を「白山文化遺産」と位置づけ、市では平成 17 年度に調査を実施しました。その調査結果の概要は、次のコーナーのとおりです。スキー場やスイートコーンだけではない、別の石徹白地区の魅力が見えくることと思います。

石徹白の四季

春



秋

冬

新年から春

昔の石徹白

第３章　御師のオーラルヒストリーからみる役割

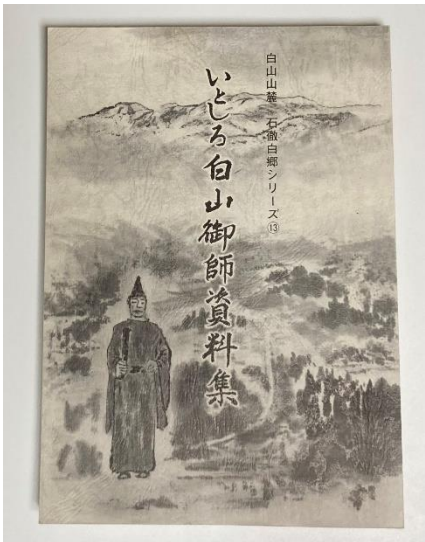
１．いとしろ白山御師白山資料集

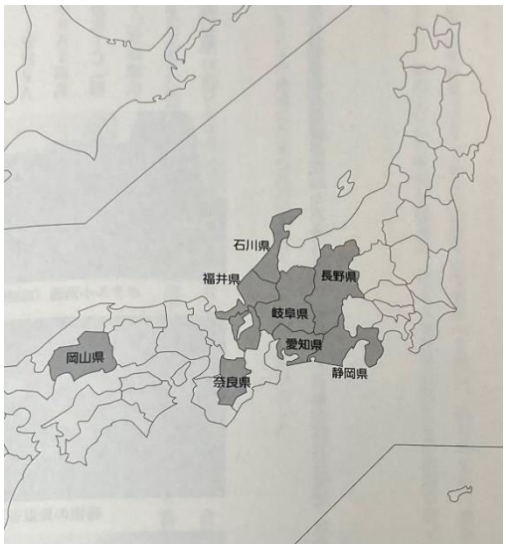
実際に御師に関する資料は、あまり多くは残っていない。その中で「白山山麓石徹白郷シリーズ⑬いとしろ白山御師資料集」を編集した上村俊邦氏に直接話を伺うことができた。その際には、石徹白に残る白山御師檀那場巡回記録を基に上村氏と全国を訪問した水上氏にも同行いただいた。

上村氏は９２歳と高齢だが、資料集の内容をひとつひとつ思い出され、当時の様子を語ってくださった。また水上氏が鮮明に覚えてみえることから、御師が担った役割や檀那場での歓迎の様子が伺えた。「たくさんのお札を残していて話も聞けた。まるで御師が訪ねてきたような気がすると言われ歓迎された」と振り返ってみえた。

上村氏が編集された白山御師資料集は、前白山中居神社宮司石徹白秀太郎家に所蔵される「石徹白愛之助の檀那場巡廻帳」を中心に、石徹白清住家の「定礼配札帳」、上杉茂夫家の「作州檀那帳」と白鳥町史に収録されている古記録を加え、記されている。石徹白御師の活動記録は戦国時代からあらわれるが、特に活発になるのは江戸時代中期からである。御師の役目は、中居神社の維持管理を始め、登山案内はもちろん宿の世話から白山への代参を請けることであり、冬期間は檀那場回りが主要な役目であったようである。記

録されている御師の巡回奉加資料によると、江戸中期から明治・大正・昭和の初期までの檀那場は、美濃、飛驒（岐阜）、尾張、三河、知多（愛知）、越前（福井）、加賀（石川）、信濃（長野）を始め、甲斐（山梨）、遠江、駿河、伊豆（静岡）、相模（神奈川）、江戸（東京）、上野、遠くは備前（岡山）にまで及んでいる。





福井新聞 2017 年 12 月 30 日より抜粋

岐阜県郡上市の山間部にあり、半世紀前に福井県から越県合併した旧石徹白（いとしろ）村で白山信仰を全国各地に広めることに尽力した「御師（おし）」たちの活動を知ってもらおうと、石徹白郷土史研究家の上村俊邦さん（８６）＝岐阜県郡上市＝が、「いとしろ白山御師資料集」をまとめた。御師が残した古文書を現代語に読み解いた書き起こし文、自ら足跡をたどった紀行文で構成。泰澄大師による白山開山１３００年の節目に発刊し、上村さんは「石徹白御師が白山信仰をどのように全国に広めたかを知り、果たした役割を考えてもらえればうれしい」としている。

石徹白は、白山への登拝ルートである三禅定道（ぜんじょうどう）のうち「美濃禅定道」の要衝で、白山中居（ちゅうきょ）神社が残る。御師の活動は泰澄の開山以前から白山が信仰の対象だった時代までさかのぼるとの説もあるが、記録は戦国時代から残り、江戸時代中期に最盛期を迎えたという。

御師は春から夏にかけて、神社の管理や、参拝者の宿泊の世話、道案内などを行い、冬の間は全国に白山信仰を広めた。信仰が浸透すると、雪解けまで信者が多い集落「檀那場（だんなば）」を巡回し、白山麓の薬草や雷よけの護符、登拝案内図である白山道略図を配布して礼金を持ち帰った。

１９５８（昭和３３）年に大部分が岐阜県白鳥町に合併するまで福井県の自治体だった元石徹白村役場職員の上村さんは、８０年近く前の幼少期に御師が春先に巡回から集落に戻ってくる様子を見ていたことなどから、関心を持っていたという。

資料集は元白山中居神社宮司宅に残っていた明治時代の「檀那場巡廻帳」を中心に江戸や大正時代のものを現代語に書き直した。御師が訪問した檀那場の名称のほか、「白山御祈祷之札（ごきとうのふだ）」の頒布といった巡回目的、各地で受け取った寄付金や経費も記されている。檀那場は東京や神奈川から岡山まで広範囲に及び、石川や福井も巡回していたことが分かった。

紀行文は、２０１１年～１５年にかけ静岡や愛知、奈良、岡山など御師の足跡を上村さんがたどった記録。長野では「たくさんのお札を残していて話も聞けた。まるで御師が訪ねてきたような気がする、と言われ歓迎された」と振り返る。節目の年に発刊し「福井でも御師を知ってもらえれば」と話している。資料集は郡上市図書館や白山文化博物館に寄贈した。

３．水上氏のオーラルヒストリー（令和 5 年 4 月 24 日実施）

【動画】https://23.gigafile.nu/0620-oeaddc2dbee8e9d7637d1950f7d7f804e
https://23.gigafile.nu/0620-p909914c15f3c70406bb7c9f3ba1fc6e9

水上精榮.mpg

【逐語録】

私は、水上精榮（みずかみせいえい）と申します。生まれは、昭和３０年４月７日です。今は、６８歳になります。ここの少し下の実家で生まれました。高鷲町鮎走古屋（あゆばしりふるや）というところです。それで小学校、中学校は、高鷲村で過ごしました。そして、高校へは、八幡町の郡上高校へ３年間行きました。それから、各務原市の岐阜大学の工学部に就職し、同時に大学へも通いました。たまたま、職場が研究室だったものですから、工学部の土木工学科の研究室で、交通工学や河川工学の部屋におりました。最終的には、河川工学の研究室にお世話になりながら。一応、職員でしたので。もう一つの組織が、今は「ものづくりセンター」という名称になっています。そこと同時に研究室の仕事をしていました。

それで各務原の時は５年間、そのあとは岐阜市の折立の方へ、本部と工学部、農学部が移転しました。今は折立で、総合大学としてやっておりますが、そこでずっと定年までおりました。結婚して、家族は今も岐阜市におります。私は定年後に、こちらに引っ越して、親の土地、休耕田をもらいました。実家にしばらく住んでいたのですが、出ないといけなくなり、住むには、ここはちょうど僕にはいいなぁと思って。ちょうど田んぼが７つぐらいありました。ユン

ボを買って、整備してビオトープを作りたかったので、７つくらいの池を作って、そこに蛍とか、トンボとか、魚とか飼ったり、昆虫とかを眺めながら、余生を過ごそうというつもりで。楽しく過ごせるか分かりませんが、私なりには楽しく過ごそうと思って。

ここに小さなログハウスを建てて、今年で８年目になります。高鷲に来た時は、色々高鷲のことが分からないので。歳が若い人たちが住んでみえるし。高鷲の郷土を知りたい、何か色々なことをやってみたいという地域貢献になれば、やりがいがあるなと。始めにドローンの会社を仲間たちと作ってやりまして、ドローンの教室で働いたりもしました。ドローンの資格も取って、少しは撮ったりもしました。今は休んでいて、また始めたいとは思っています。それを２年間ぐらいやって、その後やめました。その後、農水省の農泊の補助金を２年間もらって、それも農山間地域の宿泊をしたり、滞在型宿泊施設を計画するのですが。あと文化とか歴史を、郷土料理を見てもらったり、そういうのに関わりながら、農泊を始めたんですが、それは２年で終わりました。今は、若い人に「たかすのす」というので、引き継いでいるので、非常にありがたいなと思っています。

その後は、今は高鷲の文化財保護協会というところに入って、そういう高鷲の文化財を勉強したり、守ったりしています。たまたま、県の文化財保護協会の巡視員になったので、高鷲の文化財保護協会の巡視をしたり、報告書を書いたりしています。それに、関わったり。それと同時に、岐阜市にいる時から、もうひとつ文化と自然に関することをやりたかった。高鷲自然文化保護研究会というのを、先生達と立ち上げて高鷲のシンポジウムを５年くらい続け、報告書を２回くらい書いて、今は休んでいる状態です。今は、代表ということでやっています。

以上のように、楽しみながらやっていますけれども、今日のテーマは「白山信仰」の関係ですから。以前から、白山信仰には興味がありまして、定年になったら、白山信仰の勉強をしたいということで５０代の頃からやりたいなと。白鳥に住んでいる上村俊邦先生のところへ、勉強しに行っていろいろ本を見せていただいたりしながら。御師の話や活躍についても聞きました。全国に御師が白山信仰を広めたり、そういう話をしながら。そうなると是非、現地にも行ってみたいなという話にもなりまして。それで定年前から、御師の里巡りをしたり、富士山、白山、立山の三霊山巡りの旅を楽しみながらしてきました。そんなに、詳しくは調べられてなく、ほとんど遊びながらですので体験して感じてくるという旅をしました。

あと四国の八十八箇所巡りを車でやりました。それは、結構神仏集合の里や白山神社も調べながら、楽しんできました。そんなような人生を送っていますので遊び人と言われています。

ーそもそも、白山御師ってなんですか？

白山御師ですか。なんですかと言われると、皆さんご存知でしょうが、要するに信仰の地域ですね、

山岳信仰の地、ここだと白山の神様が、石徹白にそこから白山に行くんですけれど、そういう人の手助けをする人とか。あと御師というのは、祈祷師、御祈祷師とも呼ばれているらしいので、御師を兼ねて、祈祷師が御師になったり、修験者が御師になったりもしていると思うのです。そういう白山信仰を広める人ですかね。白山信仰の行事を自分で行って信仰を広めたり、先達と言いますか、白山へ案内をしたりとか色々なことをやられたんだと思うのです。それを石徹白では、専業と言いますか、現金収入になって続けてこられたところだと思うのですが。そんなところですかね。

－御師は何年頃から、いつぐらいまで活動してらっしゃったのでしょう？

　どうなんですかね。江戸時代中期ぐらいから、盛んに出ていたと思うんですけど。祈祷師ですと、そういう山岳信仰が始まる頃からいましたので、もっと前からの始まりだと思うんですけども。そんなところで。あまり詳しくは勉強しておりませんので、その程度で。今、結構そういうことを調べようと思うと、インターネットでね、ウィキペディアで見れば一般的なことはわかるので、あまり頭には入れずに。必要な時は見ながら。今、さらにチャットＧＰＴで調べれば、全部文章を作ってくれる時代なので。すごい時代です。それで勉強できると思うんですけど。

－上村俊邦さんを訪ねられて、ご一緒にまわろうと思われた経緯は？

　私自身は、こちらの美濃の白山文化のルーツを知りたいという希望があり、人生のテーマにしたいということなので、そういう話をしました。基本的には、私は上村先生の弟子になって、観光しながら。上村さんも、結構旅行が好きみたいで。なんとか費用を捻出しながら、私は。私が車を運転して、観光がてら、そういうことをやりましょうということになって、やったんですけどね。結構、旅館で食べる食事ですとか、お酒も、上村先生は好きですので、楽しかった思い出があります。そういう地域の人と色々会話するのも大事なんですけれど、なかなか人がいないので。ちょっとそこら辺が伺えないところもあったのですが。これがちょっと残念。　時間があまりゆっくり調査できるような旅ではなかったので、でも楽しかったという思い出です。

－事前に次はどこの檀那場に行こうとか、打ち合わせされてアポ取ったりされたんですか？

　それは、上村先生が全部そういうのを調べられているので、僕には言わずに。私は、後からまた勉強しようという気があったので。とにかくついて楽しく行くために、全部はいはいと言って、付いて、運転しながら。一応、足跡は全部地図に残してありますので、後から調

べたりもできますし。写真もたくさん撮りました。そういうのを残したので。その程度の旅ですけれど。

－何カ所か訪問されて共通するところとか、感じることはありましたか？

　御師の共通点とか。基本的には山岳文化ですので。結構、山奥まで信仰が広がって。白山神社は、山奥にあったり。四国の剣山にも、たくさん白山神社があって、ずっと上に上がっていくところに白山神社があって。探すのにも、夜までかかって写真を撮ってきた覚えもあります。
　山が中心なんですけど、結構東海一円に山の御師手帖があったりして。静岡県も多いし、長野県にも多いですし。そういうところに行きました。平地部にもあるんですよね。静岡県藤枝市とか。静岡県も静岡市の中でも平地部に白山神社が多いですよね。それは、たぶん自然に広がっている可能性もあります。なかなかそういうところは、色んな神社が競合しているから。そんなには、行ってないと思うんですけど。山岳部の本当に奥深い山奥の信仰になっているなと。興味深いなと思っています。

－木地師の話も出ていませんでしたか？

　木地師はね、滋賀県の東近江市の蛭谷というところが木地師発祥の地で、そこの惟喬親王が基でそこから木地師が発祥して、全国へ動き、広がっています。木地師も山岳系なので、高鷲なんかも木地師の伝承が残っていますけど。まぁ、郡上全体に残っています。
　木地師が、郡上の方にも記録が残っていたりして、それで重複しますよね、白山御師が辿った道と。結構つながりがあって、木地師の家に行ったのですが、喜んで対応してくれて。仲間というかそういう意識があったんじゃないかと思います。そういう情報をお互いに取り合いながら、行われたんではないかと思われますけど。

－目的を現地に行かれた時お伝えすると、皆さん好意的に対応くださったんですか？

　そうです。皆さん喜んでくれて。本当に、結構話をしてくれましたね。それで白山のお札、御寶印かな、まだ持っているお宅もあったりして。愛知県の奥三河の方だったかな。ちょっと感動したといいますか。それだけじゃなくてそういう色んなお札を持っているんですが。神仏習合ですから。その中に白山の札をちゃんと持ってみえたということもありましたし。興味深かったというか、そういうことですね。

－岡山も行かれていますよね？東海地区が多いですが、岡山にも。

岡山の作州、今ちょっと出てこないですが、美濃との関係があって。津山市に美濃町というのが残っていて。そういう、戦国時代かな、森家が城主になっているのかな。そういう関係なんだと思うんですけど。知り合いというか、つながりもあって行ったりしたのかもしれないですね。詳しいことはわからないですが。そういう人を訪ねて御師が出かけたんですかね。資料館の学芸員の人に話を聞いたんですかね。資料をくださった記憶は、あるんですけど。

もうひとつ津山出身の、私のボス（教授）が津山市の出身なのであそこは美濃を作ると書いてなんて読むんでしたかね。美作（みまさか）というまちがあって。余談かもしれませんが、そういうところもつながりがあるので興味があります。

白山は戦いの神ではないと思うんです。私は、平和の神だと思ってるんですけど。侍の人達が白山神社をもっていったことがあったようで。由緒にもそういうことが書いてあったりもしましたので、そういう風に広がったのでそこに行ったとか。御師の人達が行けるところは、色んなところへ行って、白山信仰を広めた誇り高い人達じゃないかと思うんです。白山信仰は、全国で有名というか立派な信仰です。長滝白山神社の宮司の若宮多聞さんが、石川県鶴来町白山神社での講演会の時に、「白山は日本一だ」と言われて、驚いたというか。やっぱりそれくらい若宮さんも思っているのかと。そういうことをやっている人とか、御師の人達は誇り高い、誇りを持っています。僕も白山は素晴らしいと思っているので。白山信仰はいいなと思いますね。

ーどこか訪問された時、薬というか歯の痛みの話がある場所があったのでは？

歯の神様と書いているところもありましたし。高鷲にも大洞地区に泰澄が作った祠で、歯の神様って残ったりしていますね。白山の神様は色んな神様になっている。病気の神様はあまり聞かないんですけど。当然、水分神の神様なので水の神様だし、山の神様だし、農業の神様ですね。東北なんか行くと要するに航海の神様。北前船とかそういうところに港の神社があったりして。神様として航海の神として祀られているし。漁業の神様にもなっていたりしているので。

そういうことが行くとわかる。そのために行かないと本当の地域の信仰がわからないと思います。白山信仰はなぜ広まったのかという、それを調べたいというか、そういう気持ちになったので。

ー石川、福井、岐阜は当然白山神社が多いんですけれど新潟とかも多いですよね？

新潟は多いですよ。あまり僕、本は読まないので読めばわかるかもしれない。ただ新潟は米どころだから、たぶん農業の神様として広がったんじゃないかと私は思うんですけれど。ちょっと調べてないので。新潟の一番中心に白山神社がありますよね。

ー燕市は行かれたんでしたか？

　燕市は通ったかな。ずっと北陸を通って能生というまちだったかな。茅葺きで立派な白山神社があって。歴史があって結構有名らしいんですけどね。そういうところにも行きました。

ー水上さんが何年かかけてまわられて、一番印象に残っていることやこれはしまったというようなお話はないですか？

　佐渡島にも結構白山神社があって、１２とかありましたかね。港に白山神社があって。それで船の白山丸という名前がついていて、大きな船が作ってありましたね。白山信仰の関係だと思うんですけど。そこは詳しく調べないとわからないですが。そういう白山丸という船まで作って今は祭りに出ているとか。当時は、栄えた港で興味深かったですね。
　あとは四国で一番南の高知、半島は足摺岬。そこに白山洞という白山神社が祀られてて。白山洞門は海の波で削られていて洞があって、その上に白山神社が祀られていて。里には、しっかりした白山神社があり、そこには弘法大師が開いたって言うことが書いてありましたね。弘法大師も白山信仰を受け入れていたのかなと。どうやってあんな遠いところに神様を運んできたというか。まぁ色んな修験僧が広げたりとあるので。弘法大師が作りましょうと言って、修験者と一緒にやったのか、色々勝手に想像はします。想像をするのは楽しいですから。

ー修験者の方と御師の関係やつながり、またどう違うのかがわかっていないので教えてほしい。

　僕もあんまり勉強はしていないので。そういうことを勉強しようと思って、修験学会に入ったりしています。御師は地元の人が、白山の道とかよく知っている人が多いのかもしれない。修験者が、住み着いて御師になったりすることもあるかもしれない。修験者というのは真面目にそういう能力を修行して身につける人や、若い頃から弘法大師さんみたいにやっている人もいるし。泰澄も白山修験と言われています。色んな関係で行っているんですけど。
　結構落人みたいな人が逃げ込んで、そこには侍もいるし、京都から来た貴族的な人もいる。戦に負けて、山奥に入って修行してそういう色んなものを身につけて有名な修験者になったということがあったり。そういう人が多いんじゃないかと思うんですけど。よくわかりませんね、こういうことは書いてない気がしますね、想像する訳です。

ー行かれていた時も山岳修験学会に出席されてと残っていましたが、今も行かれているんですよね？

今も行っていますよ。去年は飯田市で修験学会があって。すべて聞いてられないので、興味がある講演会や発表は参加して。最後に、現地は修験の人達が多いので、登山が得意な人達ばかりで山へ登ったり、修験のお寺を見学したりできて、面白い。全国に行きますし、また街の中ではやらない、修験の場でやるので楽しい。あとは色々交流できますし。専門的になかなか難しい話はできないんですけど、勉強になりますし。高橋教雄先生に今も入ってもらっているんです、私から誘って。修験学会では、やっぱり美濃とか郡上が知られてなくて。白山信仰というと、どうしても加賀の白山信仰になっちゃうので。越前も歴史はあるのにあまり弱い。全部加賀白山になってしまうものですから、そういう悔しさもあって。高橋先生と僕で一緒に修験学会で発表して。やっぱり、全国に認められないと研究者にね、弱いという。

高橋先生に何回も発表いただいて、僕も研究は出来ていないんですけど、いろいろな場所で白山のことを発表しました。そういう中で、色々九州の研究者の人とか、九州に別山大行事という神様がたくさんあるんですよね。ちょっと不思議なんですが。別山大行事は別山の神様なので。なんで九州にあるのかということが話題になって、その先生が郡上へ下見に来たこともあったりして。未だにそれはよくわからないんですけど。不思議なことが結構ね、面白いというかロマンがあったりしていますけど。そういう全国を調べないと物足りないといいますか。郡上の中だけでやっているとちょっと弱い。

－水上さんは、白山信仰をライフテーマにされていますがやっぱり広めていきたいという想いでしょうか？

そうですね、自分の文化ですから。高鷲も白山文化の里だと思っているし。泰澄大師が、鮎走の白山神社に来て、何日間か泊まられて、大日に登ったという記録があったり。高鷲の地名は泰澄大師がつけたという、ひるがのとか切立とか。そういう伝承が残っているので、一番身近なところでもありますし。私の地域の白山神社の由緒にそういうことが書いてある。非常に興味を持つには一番良い。そういうことをやられていればいいんだけどなかなかやられていないので。今ほっておくと消えていくという、そういう状況があるんで。誰かやってくれたらいいんですけど、なかなかそういうことが成されないものですから、なんとか関わって少しでも遺せればいいかなという気持ちもある。

－１００年先も白山信仰が残って伝わると良いですか？

そうですね。今の時代はよくわからない、ここまで来ると。ＡＩの時代になると、ちょっと難しいかもしれない。白山信仰の神仏習合の神様も仏様を受け入れるという。受け入れるという文化は大事ですし。多様性を受け入れるという文化です。戦争が起きないという考え

にもつながるので、白山信仰は、私は平和の神だと思う。あと神仏、要するに多様性を受け入れる神様である。これが大事なんじゃないかと思う。

－今の時代にもいいですね。

　よろしい。世界で受け入れられるというか、それが遺せれると。この岐阜県から、発信できるといいし。白山として、白山信仰の地域として石川県、福井県、岐阜県、富山あたりと。私が別にやることではないかもしれないけど、そういう想いだけはしている。

－高鷲も色々あると思いますが、石徹白の白山御師がそんなに活躍していた背景はどうだったんでしょう？

　石徹白の人に聞けば一番いいかもしれないが。石徹白って特殊なところなんでしょうね。歴史的に言うと勝山の平泉寺が発祥で、越前の国だったからね、石徹白は。泰澄大師が白山を登る時に、たぶん勝山だと白山が見えないからね。直接白山に登る道がわからない、当時は。九頭竜川を上っていってそういう説が当然あるんですけど、石徹白まで来ている。源流ですよね。九頭竜川の源流は石徹白ですので。そこへ来て、それで集落があって、そこから白山を目指しているという。それで石徹白は中居神社、勝山の白山神社に対して中間にあるというそういう説ですね、それは僕も理解できるので、そういう歴史があるし。
　もっと古い歴史だと、石徹白の記録にですね、４７８年雄略天皇の時代ですけど、石徹白の白山御鎮座日記という記録の中に、雄略天皇の命を受けて大彦命が。大阪ですかね、雄略天皇が白山に向かうということで、滋賀県に来て、岐阜へ来て長良川を上がっていって、郡上へ入って高鷲へ来て。高鷲の神社に来ている。奥住の宮という宮とすむの宮という宮を訪れて、それから石徹白に入ったと。
　古くから白山というのは有名な山だったんだと思うんですけど。そこから始まっているし。石徹白の人達は神様を守るためにそこに住み着いているという考えもあるでしょうし。残念ながら石徹白は何も出来なかった。今はお米が採れるでしょうけど。あそこは水がなかったんですよね。そういう信仰のまちとして生きていかないといけないし、それが大事なことなので。そういう風で御師が活躍し、御師の仕事を見いだしてというか。特徴的だと思うので命をかけて、全国へ白山信仰を広めたり、色んな薬草や地元の物を売って、現金収入にして生活の糧にしていたと思いますので。そういう神様にお仕えする村という風で発展、発展まではいかなくても続けてこられたんだと思います。

－財源というか生活がかかっていますよね。持っていく物はお札とか薬とかどんな物を持っていったのでしょう？

お札とか薬草とか祈祷するための呪術だったかな、そういう物とか。箸なんかも書いてあったかな。何かの神様の物だから、みんな買ってくれると思うんですけど。

ーいらっしゃる方がみえれば宿みたいなこともされていたのですか？

そういうね、定宿（じょうやど）という宿が長野県の新野だったかな。ありましたね。定宿は最初、常にと書いた宿だと思ったら、正しいというか定着した宿だと思うんですけど。定宿と言うのがありましたね。詳しくは調べてなかったんですが。だからそういう白山神社があって、白山信仰の人達がいるから。やっぱり色々な物をそこで信仰を深めるために行った時に快く泊めてくれるところが定宿だと思うんですけど。そういう風にちゃんと受け入れてくれるネットワークができていたというか。

富士山のてっぺんにも白山神社があるんですよね。僕見たんだけど、疲れてて、大疲労で、行こうと思ったんだけど。疲れもあるけれど、知り合いが速いので。また今度登ろうと思っている。白山神社なんですね。それはもうびっくりですね。それで当然三霊山ですから、なるほどなという風に思うんですけど。入り口の西の富士宮の浅間神社が国宝になっているかな。古い神社が別のところにあって。そこにね、定宿があったんですよね。そういう資料に残っているので、調べにいったんですが、よくわからなかったんですけど。定宿って言うのがあるんですね。すごいそういう活動の力、信仰の力はすごいというか。楽しみながらいけるというのが観光なんでしょうね。光を観る、それが観光なんです。昔だと観光の始まりですから。まさしく信仰で広めるというのは、やりがいがあるんでしょうね。

ー三霊山の中でも富士山や立山に比べて白山は認知されていないのですか？

三霊山としては認知されていると思いますよ。立山の人達が、三霊山巡りを結構している。立山の研究者、学芸員の人が結構調べて、立山の人がわざわざ白山巡って富士山巡って帰って行くというルートを作ったという記憶がある。立山は死に場所ですよね。死んでいくところ。立山で死んで富士山に登ると生き返るんですよ。生き返るために修験の人は登った。富士まで登ると富士は不死ですから死なない、長生きする。長生きしたいという風に広まっているので、三霊山巡りとしてはうまいことなっている。白山自体は、三河の人が結構白山巡りをしている。白山禅定道は三河の辺りからも、愛知県から美濃加茂を出て。そこから、郡上街道って書いてあるんですよね。それが石徹白まで色々な集落を巡って、白山に入って福井へ降りたという。色々なコースがあるんですけど。

ー白山は愛知県の津島から見えると書いてありましたが。

白山は、そこがすごいんですよ。伊勢湾から見えます。若狭湾からも見える。両方から見

えるというのはすごいですよ。あと白山に登って、夜太平洋側を見るとわかるんだけれど、灯りがね、春日井辺りが結構明るく見えるんです。名古屋辺りは影になるかな。美濃加茂、春日井、そして高鷲も見えるんです。高鷲の牧歌の里の建物が見えるんです。

－見えると拝みたくなりますよね。

そう、春日井なんかは白山という山があるし、そこから拝めるし。白山神社の中に遙拝所があって、そこで拝んだり。そういう風で船の神様にもなっているので、船当て（ふなあて）っていうのか。漁をしている時に迷子になってウロウロしていると白山が見えると。そこで、どこにいるかわかって、命が助かったとも聞きましたし。東京からは見えないですけど、東京の白山神社にも遙拝所が作ってあって、白山の方向を向いて拝むところもありましたし。

白山という信仰は面白いですよね。うまく話が通じるというか設定がされているというか。祈祷師が祈祷されながら、うまいこと話すんだと思うんですが。白山というと、浄化するという意味で色々な苦労をされた人が白山に詣りたくなるんじゃないですかね。

－もし泰澄大師にお会いできるとすれば、何か聞きたいことはありますか？

聞きたいことはいっぱいあるかも。本当に高鷲まで来たんですか。本当に白山で千日修行、百日修行しましたかとかね。そういう色々な話を聞けると有り難いですね。ただ、泰澄大師が実在したかどうかは疑問があるようですが。そういうのを利用してもいいし。白山信仰の集団はいたんだと思いますが、全国回っているし。

一番弟子の臥行者が切立のお寺を開いたと残っているし。石動山の出身なので、修験の山なので、泰澄さんの弟子としてこっちに来たというのもわかるなと思う。文化としていいんじゃないかと。文化として大事だから実在しなくてもいい。平和な文化であるということで。ずっと続けてきたというのは大事だと思うし。

－最後に水上さんが思う白山信仰を教えてください。平和の神や多様性の神とは、お聞きしましたが。

それは誰でも言っていると思う。私なりにそう思って、まとめたいとは思うのですが、なかなか。想像でやろうと思うんですが。

－これからもずっと続けられるんですね。

やれればいいなと思う。一緒に発信できる活動もしていけると良いですね。そんなような

ことです。

－御師が出かけている檀那場ではなく、来る方のことも伺いたい。白山に登って来るために御師の家に泊まるでしょ。その辺の話を伺いたい。

　檀那場から白山にお詣りして。一般的には三河の方から、白山神社があってみんなお詣りしたいということであれば、定宿の人とかお金持ちの人とか、お金が結構いりますよね。そういう費用のある人が、先達さんを中心にグループになって、お金を出し合って、来れない人は代参っていうのかな。代わりにお参りしてくださいと言うことで、なんかたぶん願いを預けて。こちらだと長滝へお詣りして、祈祷していただいたり、色々な物を寄進したりして御利益があるということです。そこに泊まって色々話を聞いたり、寺巡りをして帰る人もいるし。元気のある人は石徹白まで登って、更に元気な人は白山詣りをして帰っていく。そんな話で良いのかな。

－御師の家に泊まるんでしょ？

　そうね、御師の家に泊まって色々お話を聞いて、その中で祈祷を受けたり、ご馳走を食べたりして。それで御師の人の生活の面でもね、今で言う旅館ですよね。長滝だと神仏習合でお寺さんが沢山あったので、僧坊、お寺の行事として安く泊まれるところは沢山あったのだと思うのですが、石徹白の上在所は神様なので。神の宿、御師が神様の行事で色々なことを教えてもらって帰って行くということですかね。

－白山の案内をするんでしょ。

　先達で白山の神様にお詣りして。一番上の神様にお詣りして帰ってくるということなんでしょうけど。先達は、色々祈祷したり、途中で祈祷したりして。まず別山、ここだと別山神ですよね、白山神だと。ここら辺りは主祭神が別山神ですよね。別山まで行って帰ってきた人が多いと思うんだけど。別山で神事をして先達が祈祷して帰ってきて御利益があるという話じゃないですかね。たぶん、白山だけではなく、行きとか帰りに色々な観光地を巡ってきたりして、お土産を沢山買って地元へ帰って話をしたり、お土産を渡したりしたんじゃないですかね。
　そういう中で、白山神社が広がっていったんじゃないですかね。うちにも白山神社が欲しいという風なこともあったかもしれませんし。そのように白山神社が広がっていき、白山信仰が栄えたというか。今は、なかなかこの時代になるとそういうことが出来ていないので残念ですけど。もうちょっと研究者が郡上にいると。高橋先生が非常に詳しいですけど。難しいという。高橋先生の話を聞きながら、これからも交流していけると良いと思います。そん

なようなことで。
水上さん、本日はありがとうございました。

第４章　結言

１．白山御師の果たした役割について

白山信仰については、戦国時代に木曽義仲、藤原秀衡、足利尊氏、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康などの名だたる武将も白山神に祈願し、仏具等を寄進していることからも、白山がいかに人々から深く崇敬されていたかも伺える。

特に石徹白にある大師堂には藤原秀衡寄進と伝えられる虚空蔵菩薩座像がある。奥州平泉の藤原秀衡は霊峰白山の熱心な崇拝者で、石徹白の地に仏像を奉献した。義経の奥州への逃避行に大きな関わりを伝える、岐阜県下随一の虚空蔵菩薩である。（国指定重要文化財）。また同じ場所には織田信長が、白山別山大行事（石徹白）に寄進した鰐口もある。白山信仰をよく知る上村修一氏に背景等説明を伺った。

鎌倉時代から室町、戦国時代に御師はマスメディアの発達していない時代にあっても全国の社会状況の流れに非常に精通していた。石徹白地域は特別な場所でもあり、寄進をするということは何か見返りも求めていたのではないか。その時代、武士達にとっては領土を守るにも他国を攻めるにも情報は非常に価値があった。修験者や御師は保護するとともに、情報等を通じて影響を与えていた存在であったと思われる。

殊に白山は日本の中央に位置し、三方に出入り口を持ち、全国各地に白山神社がある。また白山信仰（長滝白山神社等）は、比叡山延暦寺含め京都にも太いパイプが繋がっていた。白山へ全国から情報が集まり、また白山から情報が全国へ散らばるといった背景があったと思われる。

江戸時代以降については、平和な時代になったことや交通網が発達したこと、信仰目的であれば往来の行き来が可能となったこと等から、御師の役割は先ほど述べた内容となったと思われる。

２．現代の観光とのつながりについて

白山信仰美濃馬場は「上り千人、下り千人」と賑わった。今で言う東海地方の観光の先駆け的な場所であると考える。白山開山1300年にあたる平成29年頃に、白山ガイドとしてツアーを行った前田氏に話を伺った。「美濃白山神社三社巡礼ツアー」や「白山御師と行く美濃禅定道」として、白山の山々や古道を歩き、聖地を巡ったとのことである。ツアーは４回程度実施し、２０人程が参加された。前田氏は、「当時の御師も時代のニーズに応じて活動されていた。現代も聖地巡礼等宗教ツーリズムが人気であり、ニーズがあるのではないか」と語られた。実際、富士山が世界遺産になり、山岳信仰が文化遺産として注目されている。特に蘇りの聖地として世界遺産「熊野古道ウォーク」等が人気である。

現在、不思議なことに日本人の御師らしき人物はおらず、日本の聖地巡礼に注目する訪日外国人が「御師」のような役割を果たしているとのことである。外国人にとっては、その国の宗教的な意味合いを持つ場所や施設を訪れることは観光の王道である。白山信仰も環境が整えば、インバウンドとしてもニーズがあるのではないかと考える。

おわりに

白山御師は、一言でいうと「地域に利益をもたらすプロ職業」でもあった。戦国時代までは、信仰、祈願もしながら、豊富な情報資源を持ち活動していた。江戸時代に入り、交通網も発達してくると白山信仰を普及する目的と貴重な財源としての御師活動も行っていた。現在、全国に２，７００社ある白山神社は石徹白地域の御師達の懸命な普及活動があったからと思われる。

そして大事なことは先人達が現在より過酷な状況の中、千年、二千年の気の遠くなるような月日をかけて培ってきた歴史遺産、文化遺産をいかにして後世に伝えていけるかである。これからは「観光」がその一翼を担うと思われる。

関連資料

１．郡上市白鳥町

岐阜県郡上市白鳥町は長良川の上流に位置し、白山山系の山々と小高い山地に囲まれた山間の地である。集落の多くは長良川が堆積した狭い平地や山裾に立地している。

江戸時代、二十一カ村あった集落は統合や合併を重ね、現在では白鳥町の十八の地区に再編され、存続している。町域を走る基幹交通は東海方面から北陸、越前へと抜ける国道１５６号線、国道１５８号線であり、その結節点でもある白鳥町は白山麓の交通の要所として多くの情報や文物が行き通う地となっている。

白鳥町長滝の長良川右岸には養老元年（７１７）年に白山の開祖泰澄（たいちょう）大師が創建したと伝えられる長滝白山神社と天台宗長龍寺がある。神社は東海方面の白山信仰の拠点であり、平安時代以降、「上がり千人、下り千人」、「菅笠の尾が触れる」と言われるほど多くの白山参詣者が参拝し、繁栄している。

長期にわたって長滝の神社等から発せられる白山神事や白山祭礼の影響もあって白鳥町一円には白山信仰によって醸成されてきた共通の風俗、慣習、生活様式等が集落の枠を超えて広がり、盆踊り、祭礼等となって今日まで引き継がれている。

また、長滝白山神社・長龍寺や石徹白の白山中居（ちゅうきょ）神社等には白山参詣者が寄進した奉納物や白山信仰の遺構も数多く残されている。白鳥町には盆踊りや祭礼、奉納物や遺構が醸し出す歴史と文化の香りが町一帯に漂い、近年、白鳥町は「白山文化の里」とも称されるようになっている。

郡上市白鳥町白鳥の風景

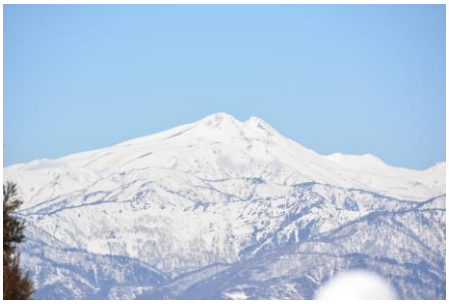
東海地方と北陸、越前方面を結ぶ交通の要所であり、市街地は白鳥神社を中心に長良川左岸沿いに南に伸びている。

長滝白山神社と長滝寺

長良川上流の右岸、白山山系の山裾に鎮座する。境内には長滝寺もあり神仏習合の面影を留めている。

1. 白山への祈り～美濃馬場の白山信仰

白山は御前ケ峰、剣ケ峰、大汝峰の三峰を持ち、石川県、福井県、岐阜県の３県にまたがる標高２７０２メートルの山である。単独でそそり立つ白山は遠く離れた濃尾平野や北陸各地からも眺望することができる。青空を背景に白雪を戴くその山姿は神々しさと清楚な美しさを感じさせ、古来より神が住む山として人々の尊崇と畏怖の対象になってきた。



○ 「霊山」崇拝

郡上一円の集落では古来から白山を「山の神」が宿る霊山として畏敬、崇拝する素朴な山岳信仰が人々の間に根付いていた。長滝白山神社や石徹白の白山中居神社、集落の白山神社の境内や森は「山の神」が宿る神域として神聖視されてきた。

禅定道に架かる注連縄（しめなわ）

白山中居神社入り口付近の上在所集落に架けられている。
注連縄の架かる地から神聖な地となる。

布橋灌頂（ぬのはしかんじょう）

白山中居神社境内を流れる宮川に架かる橋。彼岸と此岸を繋ぐ橋。参詣者はこの布橋より神域に入ったとされる。以前までは木造の橋で白布がされていたと伝えられる。

白山中居神社の磐境（いわさか）

古代の斎場、神霊が降臨する場。神殿が建てられる前までは祭祀の場であった。山岳信仰の面影が残る。

白山を霊山として神聖視することで白山麓や社域には広大な自然環境が手つかずのまま保全された。白山山系の山々から流れ出る谷川は長良川の清冽な流れとなり、流域に住む多くの生命を育んできた。

清流長良川

山間の谷間から平地に流れ出た長良川は水面に翠を映じながら穏やかな流れとなる。

長良川での游泳

白鳥町二日町。清流長良川に点在する深みは子供たちの絶好の游泳場となる。

長良川の鮎釣り風景

清流長良川は鮎などの川魚が多く生息している。シーズンに入ると東海地方等からの太公望で賑わう。

清流長良川あゆパーク

平成三十年六月に白鳥町長滝の「道の駅」にオープン世界農業遺産「清流長良川の鮎」に関する情報発信の場として開館。魚釣りやつかみ取り等、漁業に関する体験学習が行われている。

○「水分神（みくまりのかみ）」崇拝

美濃側の白山山系から流れ出る川は多くの支川を集め長良川となり、山間地を蛇行しながら河岸平野を形成し、流域の平野を潤して伊勢湾に注いでいる。白山山麓や長良川の流域で生活する人々にとって、日々見慣れた白山は飲料水や灌漑用水を供給する恵みの山であった。

白山から流れ出る大量の水によって土地の開墾がなされ、農耕地が拡大し収穫が増加するにつれ、人々の間では白山を生活に不可欠な水を供給し、五穀豊穣をもたらす水分神が鎮座する山として畏敬、崇拝する素朴な山岳信仰が生まれ、長良川やその支川沿いの集落には白山神社や小祠、遙拝所が祀られようになる。

蛭ヶ野高原の分水嶺

　白山山系から流れ出る水は郡上市高鷲町蛭ヶ野の地で分岐し、長良川、荘川の流れとなってそれぞれ伊勢湾、日本海へと流れ込む。

長良川の源流　阿弥陀ヶ滝

長良川最上流にあり、落差は６０m、豊富な水量で知られる東海地方唯一の名瀑。泰澄大師によって発見されたと伝えられ、長滝白山神社の神官、僧侶、修験者の修行の場であり、白山参詣者が身を清めた滝でもある。滝までの散策路は森林浴にも適している。日本の滝百選に指定されている。（県指定　　名所）

長良川沿いの水田地帯

白鳥町二日町。長良川から取水された豊富な農業用水が集落に豊穣をもたらす。田植え間もない頃の風景。

集落の白山神社

神社は集落の氏神であり、白山神への豊穣祈願と報謝の場でもある。白鳥町の集落の大半が白山神社を勧請している。

○「霊水」崇拝

白山の開祖泰澄大師が千匹の悪蛇を封じたとされる万年雪の積もる「千蛇ガ池」や断崖絶壁、千仞の滝から流れ落ちる白山の水は人の齢を延ばす水とされてきた。美濃馬場には白山からの湧水を霊水とする信仰が見られる。

白山千蛇ケ池の霊泉

長滝白山神社境内にある湧水。「白山千蛇ケ池」から湧き出る霊泉と伝えられ、命を長らえる薬水として神社参詣者に愛飲された。

延年水（えんねんすい）

長滝白山神社境内にある。別名を「千蛇ケ清水」と言い、夏でも枯れることはない。古文書には「道雅上人加持水」と記され、神社ではこの霊水を神仏に供え、五穀豊穣、悪霊退散の加持祈祷を行っていた。また、神社が発行し、各地に配布される牛王札（ごおうふだ）の「白山瀧宝（りゅうほう）印」はこの霊水を使用し、刷られていた。

村間ケ池（むらまがいけ）

神秘的な光景が漂う池。千蛇が住むとの伝承が伝えられている。池の湧水は年中一定の水量が保たれている。水面には睡蓮科のコウホネや羊草が花を咲かせる。白鳥町前谷地区の標高七百メートルの山中にある。（市指定天然記念物）

2. 長滝白山神社の景観

養老元年（７１７）、越前の僧泰澄大師は「霊山」として神聖視されていた白山に始めて登拝している。天長九年（８３２）には、美濃、加賀、越前の三方から白山への登拝道（禅定道（ぜんじょうどう））が開かれ、その登拝拠点には「三馬場（さんばば）」と称される社寺がそれぞれ置かれた。美濃側からの登拝拠点である「美濃馬場」の長滝白山神社は白山の名声が高まるにつれ、東海地方から多くの白山参詣者や修験者が訪れ、賑わいを見せるようになる。

平安時代後期には白山麓一円に広大な寺領を有し、「神殿仏閣三十六余宇、六谷六院、僧坊三百六十」と言われ、神仏習合の「白山中宮長滝寺」と称し法灯の最盛黄を向かえている。長滝寺では天下太平、五穀豊穣を祈願する白山神事祭礼や『延年』、そして『法華経』八巻を朝夕１巻ずつ四日間にわたり修する「修正会」、「修二会」等の法会等が宝治二年（一二四八）から約六百年間に渡って続けられてきた。

明治元年（１８６８）の神仏分離令によって「白山中宮長滝寺」は天台宗の白山長滝寺と長滝白山神社に分離し、存続の危機に瀕したが、長滝地区の氏子衆の協力もあり、祭礼や法会は失われることなく今日まで継承されている。神社境内には盛時の神仏習合の面影を伝える神殿、仏閣、堂宇の遺構、宿坊が佇み、参拝者を迎えている。

長滝白山神社の参道

参道が神社本殿に向けて伸びている。付近を長良川鉄道、国道１５６号線が並行して走る。

長滝白山神社の本殿

白山三神（白山妙理大権現、大己貴尊（おおなむち）、別山大行事（だいぎょうじ））を祀る。

本地垂迹（ほんちすいじゃく）説では白山妙理大権現は十一面観自在菩薩、大己貴尊は阿弥陀如来、別山大行事は聖観音の垂迹とされている。

長滝寺

天長五年（８２８）、法相宗から天台宗に改宗、その後、比叡山延暦寺別院となる。明治の神仏分離で天台宗白山長滝寺となる。『郡上踊り』の踊り曲＜かわさき＞で「郡上に過ぎたは長滝講堂」と歌われた講堂は明治三十二年の大火で焼失、残された礎石が往時の面影を伝えている。

石燈籠（いしとうろう）

神社本殿と長滝寺の双方に直面する位置に立てられている。正安四年（１３０２）に伝燈大法師覚海が寄進した燈籠。（国指定重要文化財）刻銘「正安四年壬寅七月日　願主伝燈大法師覚海」

宝篋印塔（ほうきょういんとう）

印経文を納める塔。天保四年（１８３３）、長滝寺僧侶の良雅の本願で寄付を募り建てられた。（市指定重要文化財）

天神堂

昭和六年に神社に合祀された。毎年二月二十五日に男の子の学問向上を願い、『天神祭り』が長滝地区の氏子衆によって行われる。

弁天堂

毎年八月七日に女子の成長と五穀豊穣を祈願する『弁財天七夕祭り』が長滝地区の氏子衆によって行われる。正応五年（１２９２）建立、その後焼失。

三重塔跡

神社の西側の山裾にはかって三重塔、常行堂、法華堂、開山堂等の堂宇が建ち並び、威容を誇っていた。三重塔は天正十三年（１５８３）の大地震と大風によって倒壊、嘉永六年（１８５３）に郡上藩に再建願いが提出されたが認可されず。

宝憧坊（ほうどうぼう）

参道入り口に位置している。多くの僧坊が退転する中、今日まで存続している坊である。僧坊には長滝寺僧侶や修験者が起居し、僧侶は月ごとに順に『荘厳講（しょうごんこう）』の執事を勤めた。また、白山参詣者の宿泊所ともなった。

蔵泉坊跡

寛文九年（１６６９）には僧坊数は二十七坊あったが寛延三年（１７５０）には十四坊になり、半減している。明治元年の神仏分離で多くの僧坊が退転、廃絶している。明治七年の神社記録には存続している坊とし蔵泉坊、大日坊、竹本坊、宝憧坊、経聞坊、持善坊、阿名院の七坊が挙げられている。蔵泉坊の名もあることからその後に退転したと思われる。

経聞坊（きょうもんぼう）

江戸時代、長滝寺の坊の中で格式が最も高い僧坊。今日まで存続している。享保年間、経聞坊の檀那場は尾州、三州、美濃等の百ケ村余りの農村を中心に、名古屋では武士にも及んでいた。経聞坊からは、終日読経が参道に流れていたと言われる。

阿名院（あみょういん）

廃絶した山伏寺の花蔵院を室町時代に経聞坊隠居の道雅法印が再興、長滝白山神社に残る唯一の坊院。境内には歴代の長滝寺僧侶の墓や六十六部廻国碑等がある。

若宮家

長滝白山神社の執行家、現在の建物は天明五年（１７８５）、文化八年（１８１１）にそれぞれ建築されている。（県指定重要文化財）

金剛童子堂

白山修験者は金剛童子堂、護摩檀で護摩を焚き、祈祷の峰入り儀式を行った。長滝寺には応仁二年（１４６８）の金剛童子堂再建の棟札がある。明治五年に修験道は廃止。

護摩壇跡

護摩を焚いた当時の礎石が残る。金剛童子堂の前にある。

入峯堂跡

白山修験者は峰入りの儀式を受けた後、入峯堂に籠もり身心を清め、一般の白山参詣者が利用する美濃禅定道（ぜんじょうどう）とは異なる行者道で白山頂上へと向かった。

行者道の跡

行者道のおおよその行程は「金剛童子堂」～「一ノ宿」～「三ノ宿」～「三国峠」～「大日宿」～「神鳩」～「白山頂上」であった。途次、「白山二十八宿」で山伏は修行し宿をとった。今日、道の多くに草木が生い茂り、わずかな痕跡を残すのみである。

3.　長滝白山神社の奉納遺産

長滝白山神社には尾張や三河から多くの白山参詣者が訪れている。長滝白山神社にはこれらの白山参詣者が五穀豊穣、延命息災等を祈願し、奉納した奉納遺産が数多く残されている。現在、これらの奉納遺産は白山文化博物館の常設展、及び白山瀧宝殿で見ることができる。

瓶子

正和元年（１３１２）に中島郡奥田にある天台宗の安楽寺高僧の栄秀が白山神に奉納。「中島郡奥田」は現在の愛知県稲沢市奥田町にあたる。（国指定重要文化財）

瓶子

尾州愛知郡の清原広重が同型の瓶子を同じ正和元年十二月に奉納している。「尾州愛知郡」は現在の愛知県愛知郡東郷町、日進市、長久手市、瀬戸市付近。（国指定重要文化財）二口ともに神前に配される酒器。

昭和八年（１９３３）越美南線工事中、神社近くの民家の地下から対で掘り出された。正和元年制作の古瀬戸は他に類をみない。二口の瓶子は形状もほとんど同一で同一制作者である。奉納者の清原広重は瀬戸物の産地の瀬戸市付近に住んでいることから、安楽寺の阿闍梨の栄秀が陶工の清原広重に制作を依頼し、二口制作し、二人で別々に奉納した瓶子と思われる。

仏餉鉢（ぶつしょうばち）

正和三年（１３１４）に伴友長が奉納した鉢。米や供物を仏前に盛る容器。奉納された三口のひとつ。（国指定重要文化財）

吊り燈籠

天文年間に愛知県犬山市の水野勘左衛門が所願成就を願い奉納した吊燈籠。釣環は亡失している。（市指定重要文化財）

五部大乗経唐櫃（ごぶだいじょうきょうからびつ）

弘安二年（１２７９）に白山の別山社に五部大乗経を施入した際に使用したスギ材の唐櫃。奉納の銘文は、うちぶたに朱漆で記されている。（県指定重要文化財）

経机（きょうづくえ）

静岡県袋井市国本の住人平野常光と平野勝五郎の両名が奉納した木製の机。（県指定重要文化財）

狩衣

尾州名古屋の有萱又左衛門が元和六年（１６２０）に奉納。長滝寺の修正会の後宴『延年』の演目＜当弁＞で役者が着した狩衣。
蝶と梅模様、牡丹模様の二流が残されている。（国指定重要文化財）

能面＜翁＞

駿河の人が天文十一年（１５４２）に奉納した翁面。長滝寺では戦国時代、越前から大和五郎大夫が来訪し僧侶に能を教え、その成果が『延年』や領主の･で演じられていた。本面は五穀豊穣、天下太平を言祝ぐ長滝寺の神事能＜式三番＞で使用された面。制作者の「酒惣」の出自については不明。（国指定重要文化財）

古猿楽面（１）

応安二年（１３６９）に奉納された面。『延年』で演じられていた物真似芸の猿楽で使用された面と思われる。　　（尉）面が様式化される以前の面（国指定重要文化財）

古猿楽面（２）

『延年』の物真似や田楽で使用されていた面。頻繁に使用された形跡がある。能面制作史上、注目される面。（国指定重要文化財）

能面＜若い女＞

白山参詣者が文明二年（１４７０）に奉納した能面。女面の様式が統一される移行期に制作された面と思われる。天文年間、『延年』の能で大和五郎大夫や長滝寺僧侶が手猿楽で使用した面。（国指定重要文化財）

能面＜喝食（かっしき）＞

福井県福井市北庄の住人が元和二年（１６１６）に延命息災を願い長滝白山神社に奉納した面。面裏の鼻の部分に「◇」が刻されていることから、面は近江の世襲面打ち井関家が戦国時代に制作した面と思われる。「喝食」とは禅寺にて寺院の雑務等に従事する半俗半僧の僧を言う。（国指定重要文化財）

4. 白山への道～美濃禅定道の遺構

長滝白山神社に参詣し、供物を奉納した参詣者は白山頂上を目指した。長滝白山神社から頂上への道は美濃禅定道と呼ばれ、長滝白山神社を起点に郡上市白鳥町前谷を経て、白鳥町石徹白の白山中居神社より白山頂上に至る全長約４０キロメートルの山道である『白山之記』に「白山は観音菩薩利益の砌なり。一度清涼の峰を踐（ふ）めば、必ず文殊の利益に預かり、一度白山によづる類観音の冥助を疑がはざるものか」とある。白山参詣者は禅定道沿いにある道標や白山神を祀る社や小祠、泰澄大師の事蹟跡、修行僧が籠もった石室の修行跡に遺徳を偲び、白山の懐に懐かれたとの幸福感を懐きながら、登拝の危険や辛苦も厭わず、白山の奥宮を目指したのである。白山登拝を成し遂げた参詣者の多くは頂上に祀られた仏像や石垣で防御された粗末な奥宮、御来迎や日没の神秘的な光景を目の当たりにし、白山神への尊崇の念をさらに高揚させたものと思われる。

文化四年（１８０７）の初秋に白山登拝を行った白鳥町歩岐島の悲願寺住職は次ぎのような行程を経ている。

長滝白山神社～床並社～桧峠～一之瀬社～石徹白～白山中居神社～斧石～美女下社犬石～おたけり坂～かぶろ杉～神鳩宮～母御石～銚子ガ峯～一の峯～二の峯～三の峯美濃室跡

～御手洗池～別山～大屏風～小屏風～南龍が馬場～高天原～御前峯～白山奥宮剣が峯～翠が池～大汝峯～蛇塚～市ノ瀬

住職は奥宮に参拝後、越前禅定道を下り、市ノ瀬経由で杉峠を越え、大野市の鳩ヶ湯、和泉を経て白鳥町歩岐島に戻ったと思われる。白鳥町を通過する美濃禅定道は近年まで生活道としても利用されていたが、国道１５６号線や県道３１４号線（石徹白・前谷線）の整備によりその多くが欠失し、道筋は不明になりつつある。残された禅定道には草木が生い茂り、かつて参詣者を癒やした社や小祠、石仏等は道沿いにひっそりと佇んでいる。一方、林道の敷設により新たな登山口となった「石徹白の大杉」付近から別山までの禅定道は大正年間以降、石徹白の人々やボランティアによって毎年、「白山道刈り」が行われ、道の保全と維持がされている。

十一面観音像の道標

白鳥町前谷の国道１５６号線と県道３１４号線が分岐する地。台座には「右飛騨道 左白山」とあり、文久元年（１８６１）に当地の氏子衆が奉納している。

前谷の禅定道

白鳥町前谷の県道３１４号線沿いに残る。

禅定道にある床並(とこなみ)社跡

白鳥町前谷の山中。参詣者が礼拝し、疲れた体を休めた社。明治期に前谷の白山神社に合祀され、その社跡には前谷の氏子によって建てられた石碑と二十段の石段が整備されている。

床並社跡付近の禅定道

利用されなくなった禅定道の石畳には雑草が生い茂っている。

桧峠付近の禅定道と小祠

白鳥町前谷と白鳥町石徹白の境界。桧峠はかって「三国峠」とも呼ばれていた。道筋には草木が生い茂っている。

石徹白の山中の禅定道

禅定道は生活道として近年まで利用されていた。
カルヴィラいとしろ付近。

中在所にある禅定道の道標

禅定道と大野道（福井県大野市方面）
との分岐点に置かれ、
「是より右ハ白山左ハ大の」
とある。

石徹白集落の禅定道

禅定道は集落の東側を走り、
白山中居神社へと続く。

「浄安スギ」付近の禅定道

利用されなくなって久しい。近年、付近の禅定道が整備されつつある。樹齢１２００年と言われる「スギ」は多くの登拝者を見てきたのであろう。

禅定道にある美女下社跡　禅定道に残る社の礎石

白山への女人登拝はここから禁制になっていた。社跡には大杉の切り株跡が残る。

禅定道にある斧石

泰澄が登拝の折、使用していた斧を「結界」との理由で石に打ち付け、刃をつぶしたとの言い伝えがある。石の穴はその際のものと言われる。

禅定道にある犬石

泰澄の母の下山を待つ侍女が石になったと伝えられる。

白山登山口

林道の敷設により標高９６５メートルの地に新たに設けられた石徹白からの登山口。３０台の駐車可。石段を登りきると「石徹白の大スギ」付近を通過する禅定道と合流する。

石徹白の大スギ

推定樹齢１８００年、周囲十二メートル、十二人抱えの大杉と言われる古木。「大スギ」は禅定道を往く多くの登拝者を見守ってきたのであろう。(国指定特別記念物)

白山登山道の清掃

ボランテイアによる清掃。「石徹白の大スギ」付近。

5.　　石徹白集落の風景

白山中居神社がある郡上市白鳥町石徹白は白山南麓の緩やかな傾斜地に開けた戸数１１１戸、人口２５６人（平成３０年６月現在）の小さな集落である。以前までは福井県大野郡に属

していたが、隣接する郡上との交流が深く、昭和３３年越県合併で岐阜県郡上郡白鳥町（現郡上市白鳥町）に編入している。平安時代に著された『白山之記』に「石同代ト云社マテ女人ハ参詣ス」とあり、石徹白は古くから白山の登拝口となっていた。集落は上在所、中在所、西在所、下在所の四地区で構成され、住民は土地の産土神（うぶすなかみ）でもある白山中居神社に社家・社人として仕えていた。

白山中居神社の近辺に位置する上在所は神社の祭祀を行う社家が居住する地区であり、「白山御師（おし）」の里とも称されていた。一方、中在所は美濃禅定道が桧峠を越え、初めて石徹白の集落に入る地であり、泰澄大師を祀る大師堂や浄土真宗の威徳寺、旅館等の家々が建ち並び、また室町時代に石徹白を統治した石徹白氏の城跡もあり、歴史の面影を伝える地区となっている。西在所は集落の中で高い台地にあり、広い水田の間に家々がまばらに点在し、自動車や農作業用の軽トラックが行き通う農耕地が広がっている。下在所は台地の縁に位置し、家々は福井県大野市へ伸びる県道１２７号線（石徹白・朝日線）沿いに細長に点在している。

石徹白のすべての家の土台は石積みであり、屋敷林や門構え、屏はなく、隣家との距離もあり、広々としている。石積みは道路や水路、池、農地の区画にも数多く用いられている。

高台から眺望する石徹白は白山山系の山々を背後にして、杉木立や水田が広がり、その合間を長滝白山神社からの美濃禅定道、基幹道、そして大野市へと向かう「おおの道」が南北に走り、開放感ある農村風景を醸し出している。

上在所の風景

白山中居神社の門前の地に、かつての御師の家屋が並ぶ。

中在所の風景
石徹白地区の中心地。家屋が密集している。

西在所の風景
農耕地（畑・水田）が広がる。

下在所の風景
福井県大野市と近接しとている。

6. 白山中居神社の景観
白山中居神社は白山山系から流れ出る石徹白川と宮川が合流する地に鎮座している。鳥居をくぐり、杉の巨木を抜け、宮川の布橋を渡り切ると神社境内に到達する。集落の産土神でもある神さびた神社は養老元年（７１７）、泰澄大師が白山を開く途次、社殿を修復、拡張したと伝えられる。

境内には古代祭祀跡の磐境が祀られ、泰澄大師堂跡も残されるなど、山岳信仰の面影が色濃く漂っている。白山登拝者は神社東側を通過する登拝起点から神社背後に広がる杉、ブナの自然林の中を白山頂上に向けて歩を進めたのである。

白山中居神社本殿

本殿は安政年間（１８５４～１８５９）に越前志比（福井県吉田郡永平寺町志比）の大工により再建されている。梁には同時代に大坂と諏訪の彫刻師が彫った龍、水、うづら、葡萄の彫刻が、正面には鳳、桐の花が彫られている。「七十五翁、立川富昌（花押)」とある（彫刻は県指定重要文化財)。

白山中居神社の森

神社境内には推定樹齢二百年から千年の杉の巨木が林立し参道、社殿を取り囲んでいる。（県指定天然記念物）

磐境

神霊が降臨する場であり、古代に は祭祀が行われていた。六月十八日に磐境の前で創業祭が行われ、社家が御幣を捧げる。

泰澄堂跡

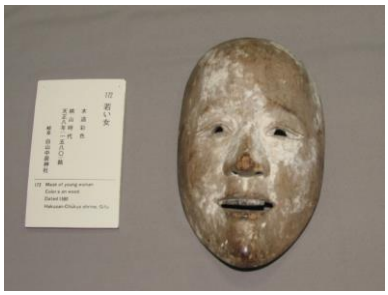
明治の神仏分離で大師堂に合祀された。 白山中居神社の神仏習合の面影がただよう。

7. 白山中居神社の奉納遺産

白山参詣者は長滝白山神社を経て、白山中居神社に参詣、供物を奉納し白山頂上を目指した。白山中居神社には東海地方からの奉納された供物が多く見られる。これらの奉納物の中、仏教関係の供物は明治の神仏分離令により新たに建造された観音堂と泰澄大師を祀る大師堂に移され、神社には神道関係、祭礼関係の奉納物を残すのみとなっている。

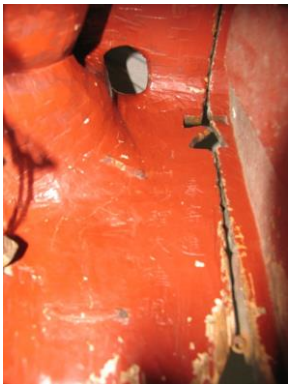
能面＜若い女＞

美濃馬場の白山信仰が盛んな天正八年（１５８０）に柴山喜蔵が五穀豊穣、延命息災等の祈願成就を白山神に願い、奉納した面。現行の様式化された女面とは違い、写実的な作りに特徴がある。（県指定重要文化財）



木造獅子頭

貞享五年（１６８８）に美濃の恵那郡加子母村の熊沢与七が白山神に家内安全、除厄を祈願し、奉納した獅子頭。刻銘がかすかに残る。



8. 大師堂の奉納遺産

石徹白の浄土真宗門徒によって明治五年（１８７２）に泰澄大師を祀る観音堂・大師堂として中在所に建てられた。堂には中居神社から移された仏像、仏具等の奉納物が納められている。

大師堂の風景

堂の入り口には泰澄大師の石像が建つ。大師堂では三月十八日の大師の命日に門徒によって法要が行われている。

泰澄大師坐像

泰澄大師か初めて白山登拝をした三十六歳の期の坐像とされる。後補が加えられている。（市指定重要文化財）

花瓶

応永二年（１３９５）に郡上市大和町牧にあった「尊星王院」の仏慶が神鳩社に奉納した花立。「神鳩」は美濃禅定道に祀られていた神鳩社。（市指定重要文化財）

銅造虚空蔵菩薩坐像

神仏分離以前までは白山中居神社の本地仏として祀られていた。平安時代末期に奥州平泉豪族の藤原秀衡が奉納したと伝えられる。金属工芸の高い技術で制作されており、日本の彫刻史上、特筆すべき金銅仏である。若干の後補がなされている。（国指定重要文化財）

青銅鰐口

織田信長が元亀二年（１５７１）に家臣の菅谷九右衛門を奉行として社家の石徹白源三郎胤弘の祈願によって白山の三神の一つ別山大行事に奉納した鰐口。「信長鰐口」として知られる。（県指定重要文化財）

9.　石徹白の白山御師

上在所に居住する白山中居神社の「社家」は「白山御師」として白山信仰を全国各地に広めている。その布教活動は冬期の一月から五月にかけて各地の集落に赴き、神札、白山略図、雷よけの護札、白山薬草を配布した。また、当地へ白山社を勧請するため村民に協力を求めるなど、勧進僧的な役割をも果たしていた。白山登拝シーズンの七月～八月には檀那場から白山登拝に訪れる白山講の講員や巡礼を自宅に泊まらせ、祈祷や禅定道の道案内を行っていた。御師の巡回によって白山信仰が定着した「檀那場（だんなば）」は飛騨、美濃、越前、近江、尾張、三河、信濃、甲斐、遠江、駿河、相模、武蔵、上野（こうずけ）、石見（いわみ）、美作（みまさか）等に及んでいた。「白山御師」の布教活動は三馬場では美濃馬場にのみで、明治三年に御師制度は廃止されたが、石徹白では大正年間まで続いていた。

御師の家　石徹白伊織家

石徹白に残る唯一の御師の家。越前志比の大工によって万延元年（１８６０）頃に建てられている。切妻式の平屋でトタン板、かってはクレ板葺であった。門構え等はなく水田と消雪用の池に囲まれ、部屋は「シンレイノマ」、「キャクマ」等の八間。参詣者は一階に宿泊していた。

石徹白清住家

切妻式の二階建て、かってはクレ板葺であった。二階には「ゴシンゼンノマ」、「ミタマサマノマ」がある。神前の間と仏間から、神道と浄土真宗の双方の影響が見て取られる。
（国登録有形文化財）

白山版木

御師が檀那場で配布した神札等の木

10. 白山信仰が育んできた芸能と祭礼

長滝白山神社では宝治年間（１２４７）頃から天下太平、五穀豊穣を白山神に祈願する例祭や法会が行われ、後宴の芸能が僧侶や神官、山伏等によって盛大に催されてきた。

長滝白山神社の祭礼や芸能は白鳥町一円の集落にも波及し、末社の白山神社の祭礼では氏子衆によって五穀豊穣、延命息災を感謝、祈願する祭礼や芸能が奉納されるようになる。

○長滝白山神社の芸能『延年』

長滝白山神社の『延年』は一月六日の「六日祭（むいかまつり）」に奉納される。 拝殿の中央には胡桃等の白山の幸が盛られ、白山の三峰の御前峰、大汝峰、別山に似せ白米が盛られ、山に雲がかかる様子を表現した紙ばりを被い、依代（よりしろ）となる三日月松が立てられる。この「菓子台」の前で最初の演目の《酌取り》がなされる。《酌取り（しゃくとり）》が終わると「菓子台」の供物は参拝者に

播かれる。次ぎの《当弁（とうべん）》では役者が当弁竿を振りかざし梅、竹の功徳を褒め称える。続く《露払い（つゆはらい）》では鬼面の武者姿の役者が

扇をかざし、囃子に合わせて剣舞や足踏みなどの所作を行う。《乱拍子》では稚児が「開運厄除祈祷札白山総社表本宮白山長滝神社」と記された菊の造花を持ち、舞台を廻り、小さな足踏みを行う。演目は《田歌》、《花笠ねり歌》、《当弁ねり歌》と続き、《しろすり》へと進む。腰に鎌をさした農作業の出で立ちの役者が社領の鍬打ちをすると述べ、白山神社の繁栄を讃える詞章を述べ、田打ちの所作を繰り返す。

このように『延年』は厳粛な中にも随所に白山との関わりを演出し、華やかさを漂わせながら滞りなく演じられていく。最後の《大衆舞》で役者は「はっさいや」の掛け声とともに足拍子を踏み、片手を挙げて首をひねるコミカルなしぐさをして退場、『延年』は終了する。

一方、舞台上の『延年』が佳境にさしかかった頃、拝殿の天井に吊られた「花笠」の奪い合いが始まる。若者が「人梯子」を組み、「花笠」を引きずり下ろそうとするが幾度となくその梯子は崩れる。「花笠」が地に落ちるや多くの参拝者が殺到する。「花奪い」で花笠の断片を手にした参拝者は白山の神の依代として家に持ち帰り、五穀豊穣、延命息災、家内安全を願い、神棚に祭祀するのである。（国指定無形民俗文化財）

『延年』の演目

白山からの寒風が吹きすさぶ拝殿で行われる。

＜答弁＞

＜しろすり＞

＜露払い＞

菓子台

江戸時代までは「菓子台」の前で長老の僧侶が天下太平、五穀豊穣、寺領の繁栄を白山に祈願し、賛を唱える演目の「菓種」があった。

演目《酌取り》

永瀧寺に居住まいする山伏が演じる演目であった。

花奪祭り

明治時代以降、拝殿土間で行われるようになったと言われる。

＜飛出（とびで）＞面

天文年間（１５３２～１５５４）の時期、越前の大和五大夫が長滝寺の僧侶に能を指導して

いる。神社には『延年』の夜の能で使用された能面が残されている。
＜飛出＞面はその一面。（国指定重要文化財）

○長滝白山神社の祭礼『でででん祭』

長滝白山神社では。五月五日の端午の節句に子供の成長を白山神に祈願する例祭が行われる。開始時に打たれる太鼓の音に模し、「でででん祭り」とも言われる。本祭前日、菖蒲、よもぎ、山吹が供えられた白山三社の神輿（みこし）の前で宮司による祝詞、お祓いが行われ、その後、子供達は神輿の隙間をくぐり抜ける。以前までは男の子が中心であったが、近年は地区以外の成人、男女誰でも参加できる。五日当日は神事の後、巫女四人による「浦安の舞」が奉納され、太鼓の合図とともに白山三社の神輿は宮司を先頭に白装束、立て烏帽子の若者八人によって担がれ、御旅所までの渡御が始まる。子供御輿も加わる。御旅所では祝詞奏上の神事の後、菖蒲酒が振る舞われ、神輿は再び本殿に還御される。その後、境内では餅撒きが行われ、参拝者は白山神の縁起物の餅を競い合って取り合うのである。

神輿くぐりと安浦の舞

子供の無病息災と健やかな成長を願う行事がに行われる。

御神体の神輿渡御（みこしとぎょ）

参道にある太鼓橋を渡るときが渡御のハイライト。

○長滝地区の祭礼『弁天七夕祭り』

長滝白山神社に合祀されている弁天堂では八月七日に『弁天様の祭り』が長滝の氏子衆によって行われている。『祭り』では女の子が弁天堂の前に整列し、長滝寺の僧侶が《般若心経》を読経、各自がお参りした後、青竹に自作の和歌や「天の川、「なす」、「きゅうり」と書いた短冊を吊し、「弁天様のお祭りじゃ、秋のこがねの豊年じゃ」と唱えながら長滝地区の家々を回る。提供された供物は弁天堂に供えられる。「弁天様の祭り」は長滝の『弁天七夕祭り』が水分神でもある白山の神と結びつき、豊穣を願う祭りへと変容したものと思われる。

以前までは『弁天様の祭り』は男女を問わず行っていたが、昭和六年に境内に天神堂が合祀され、それ以降は男子は『天神様の祭り』、女子は『弁天様の祭り』として区分され、それぞれ行われるようになった。

弁天七夕祭り

巡回風景

○長滝地区の祭礼『天神祭り』

昭和六年に長滝白山神社に合祀された天神堂では毎年二月二十五日に男の子の成長と学問の向上を願う『天神祭り』が長滝地区の氏子衆によって催される。祭りの前日、男の子たちは長滝の家々を回り、供物としての提供された餅米で餅をつき、菅原道真の歌「東風吹かば匂いおこせよ梅の花あるじなしとて　春な忘れそ」、「ひさかたの月の桂も祈るばかり家の風をも吹かせてしがな」を半紙に毛筆で清書する。祭り当日、男の子たちは清書した歌と餅を天神様に供え、長滝白山神社の宮司の祝詞を受ける。その後、両親や一般の人々も参加し、雪を積み重ねた高台から男の子による餅撒きが行われ、祭りは終了する。清書された歌と餅は長滝地区の全戸に配布され、居間や子供部屋に供えられる。

天神祭り

雪かき等の会場設営は長滝地区の　　人々が行う。

宮司の祝詞　　もちまき

白山中居神社の例祭と『五段の神楽』

白山中居神社では五月十五日に神迎え祭りの春季例祭が行われ、神事芸能の『五段の神楽』が神事終了後に奉納される。「五段の神楽」は巫女姿の姉と妹の二人が鈴を振り、扇、弊束をかざしながら笛、鼓、大小の太鼓、雅楽に合わせ、静かな足取りで舞いを舞う。

演目は＜とびの舞＞、＜二人舞＞、＜扇の舞＞、＜鈴の舞＞、＜弊の舞＞があり、最後に姉妹は神前に置かれた小机の前に坐り白山神に二拝して舞を終える。

その後、境内の磐境前で神事が行われ、御旅所（おたびしょ）までの「神輿渡御」が始まる。御旅所では地元の婦人会によって『石徹白の民踊り』も披露される。（市指定重要無形民俗文化財）

五段の神楽

神輿渡御の風景

○『白鳥踊り』と『拝殿踊り』

白鳥町一円の集落の盆踊りは享保八年（１７２３）以前から神社拝殿で行われていた。拝殿での踊り曲は石徹白の白山への祈祷に起源を持つ＜場所踊り＞であった。踊りの形態は天井から吊られた悪霊封じのキリコ灯籠の下、音頭取りの音頭に合わせて両手を後ろに汲み、手足を前後左右にゆっくりと移動させ、下駄の音でリズムを取りながら踊る単純な所作の輪踊りである。

踊りは享保八年の奉行所の停止命令、明治政府の禁止令、大正、昭和の度重なる戦争、自然災害にも途絶えることなく集落の神社拝殿で踊り続けられてきた。

第二次大戦後、踊りの場所は拝殿から市街へと移り、その形態も屋形から流れる音頭取りの音頭と太鼓、三味線、笛の伴奏に合わせて白山麓の民謡を軽快なテンポで踊る『白鳥踊り』へと変容している。

これによって囃子なしの『拝殿踊り』は衰退し、＜場所踊り＞はほとんど踊られなくなった。

一部の踊り好きによって各集落の神社拝殿で細々と踊られていた。平成八年『白鳥の拝殿踊り』として白鳥町重要無形民俗文化財に指定されてから注目されるようになった。今日では『白鳥踊り』の期間中、長滝、前谷、白鳥、野添の集落の白山神社拝殿などで古態のままの＜場所踊り＞を含め、＜さのさ＞、＜よいとそりゃ＞、＜チョイナチョイナ＞や忘れ去られた曲、廃絶した曲が即興で踊られる。＜場所踊り＞の神さびた所作は白山への祈祷芸の面影を今日に伝えている。

『白鳥踊り』

軽快な踊り曲＜神代＞が若者に好まれる。踊り場を変え二十一夜にわたって踊られる。

『拝殿踊り』

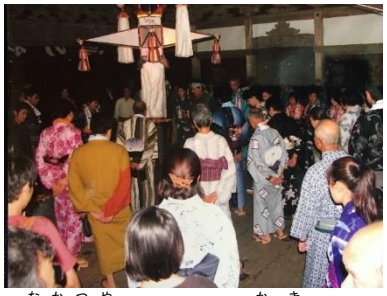
静寂な夜の境内に踊りの別世界が形成される。（国選択無形民俗文化財）

長滝白山神社

白鳥神社

野添・貴船神社

野添・貴船神社



中津屋（なかつや）地区の『嘉喜（かき）踊り』

郡上市一円の集落では九月から十月にかけて氏神の白山神等に五穀豊穣、村民快楽を祈願し、感謝する神事芸能の『かき踊り』が奉納されてきた。

近年、集落の少子化、高齢化の影響もあり、郡上一円の『かき踊り』は姿を消しつつあり、白鳥町では今日では中津屋地区のみとなり、数年に一度、『大神楽』と併せて氏神の白山神社と八幡神社で奉納される。八十名余りの役者と輪の中央に配された三人の「拍子打」が踊る色彩感溢れる輪踊りである。

踊りは「東西よばり」役の「東西しずまれおしずまれ」の一声で始まり、「歌おろし」役が氏神の白山神社を鑽仰し、宮の造り、周囲の四季の景観、農事の様子を愛でる詩章を交代で歌い、その音頭に合わせ「拍子打ち」が太鼓を打ちながら軽快に踊る。他の大勢の役者は「ヤッコリャコリャ、ドッコイサ　ドッコイサ」と囃しながら足を前後させ、両足を揃えて手拍子を打つ所作を繰り返す。

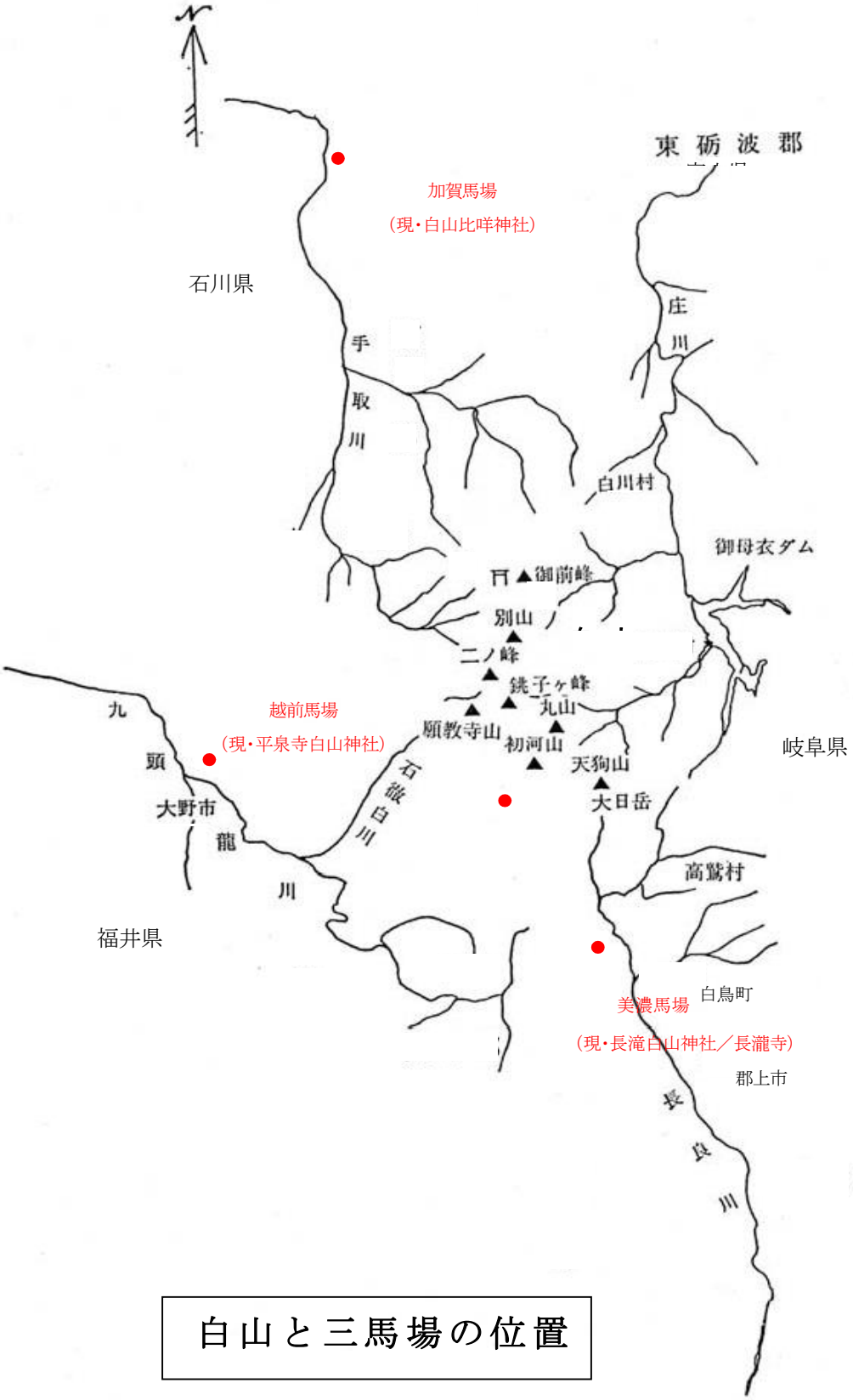
＜本踊り＞、＜十禅寺踊り＞と進み、＜返し踊り＞に入ると「拍子打」は身をかがめ背中のシナイで境内を掃く真似する。ここが『嘉喜踊り』の見せ場となり多くの観客から歓声があがる。（県指定無形民俗文化財）

中津屋地区の白山神社

養老年間、泰澄が創建したと伝えられる。かつては「東永山十禅寺」と称されていた。

白山神社の『嘉喜踊り』

中津屋地区には白山神社、八幡神社の二つの氏神が祀られている。『嘉喜踊り』は両神社で奉納される。


東砺波郡
加賀馬場
（現・白山比咩神社）
石川県
手
取
川
庄
川
白川村
御母衣ダム
御前峰
別山
二ノ峰
銚子ヶ峰
丸山
願教寺山
初河山
天狗山
大日岳
越前馬場
（現・平泉寺白山神社）
九
頭
大野市
龍
川
石徹白川
岐阜県
高鷲村
福井県
白鳥町
美濃馬場
（現・長滝白山神社／長瀧寺）
郡上市
長
良
川

白山と三馬場の位置

慶長一八年　郡上藩主・遠藤慶隆、長滝寺神馬堂を建立する
寛文三年　石徹白の桜井保正『泰澄和尚伝記』、翌年『白山権現鏡巻』を書写
寛文八年　郡上藩主・遠藤常友、白山中宮長滝寺において神前謹厳祈願
貞享二年　郡上藩主・遠藤常友、長滝向島新田二三石余りを長滝寺に寄進
元禄五年　長滝寺、長滝村となる
元禄一〇年　石徹白、郡上藩の支配となる
享保四年　白山長滝寺開山尊像の開帳を行う
元文元年　別山宝の支配をめぐり石徹白と越前馬場の平泉寺の公事はじまる
寛保三年　石徹白・平泉寺の訴訟裁許となる
宝暦二年　石徹白騒動はじまる（宝暦八年に幕府評定所判決が出て決着）
天保四年　長滝寺の宝篋印塔建立
天保一五年　長滝寺二万人講はじまる
嘉永六年　郡上藩主・青山氏、長滝寺に参詣
明治元年　明治政府が神仏混淆を禁止、以後全国で廃仏き釈運動起こる
明治二年　石徹白で神葬祭事件、翌年、郡上役所へ神葬祭について嘆願書提出
明治五年　石徹白帰農社人ら大師堂・観音堂を営み仏体類を納める
明治七年　石徹白小学校（円周寺仮教場）設けられる
明治三二年　長滝白山神社・長滝寺火災にかかる
昭和八年　長滝で越美南線工事中に古瀬戸黄釉瓶子（国重文）発掘される
昭和三一年　石徹白村の越県合併両町村議会で議決
昭和三三年　石徹白村の越県合併閣議決定、岐阜県郡上郡白鳥町に編入合併
昭和三七年　白山連峰の一帯を国立公園に指定
昭和四四年　石徹白に岐阜県心のふるさとの家開所
昭和四六年　長滝宝物収蔵庫（龍宝殿）完成
昭和四七年　石徹白総合庁舎竣工
昭和五〇年　石徹白青少年旅行村竣工
昭和五四年　石徹白大師堂に銅造虚空像菩薩坐像（国重文）の保存庫完成
昭和六一年　石徹白大師堂の銅造虚空像菩薩坐像（伝・藤原秀衡寄進）が、岩手県・中尊寺の一字金輪仏像と並座公開
昭和六二年　長滝白山神社参道南・旧北濃村役場に長滝歴史公園完成
長滝の町歴史民俗資料館東にふるさと生活博物館開館
昭和六三年　長良川鉄道「白山長滝駅」開駅
平成四年　白山長滝公園完成（平成六年に「道の駅」に登録される）
平成八年　石徹白に石徹白交流センター「カルヴィラいとしろ」開館
平成九年　白山長滝公園・道の駅に白山文化博物館開館
平成一〇年　カルヴィラいとしろ横に「石徹白ふるさと館」開館
平成一六年　八幡町・大和町・白鳥町・高鷲村・美並村・明宝村・和良村が合併、郡上市が誕生する

参考文献『白鳥町史』『白鳥町合併二十年誌』

（年）	（内　容）
養老元年	越の国麻生津（現・福井市三十八町）の僧・泰澄、白山を開く
	僧・泰澄、長滝に白山中宮を建立（現・長滝白山神社／長瀧寺）
	僧・泰澄、石徹白の白山中居神社の社域を拡張、社殿を修復
養老六年	僧・泰澄、阿弥陀ケ滝を発見、白山中宮に長滝寺を創建
天平二年	元正天皇、本地十一面観音・聖観音・阿弥陀如来の三像を奉納（以降、中宮長滝寺を白山本地中宮長滝寺と称す）
天長五年	長滝寺が天台宗比叡山延暦寺の末寺となる
天長九年	白山の三つの馬場（美濃・越前・加賀）と禅定道が開かれる
斉衡五年	白山信仰の神・白山妙理大権現が天台宗比叡山延暦寺に勧請される
天徳二年	越前大谷寺の神興上人により『泰澄和尚伝記』が著される
治安元年	長滝寺、後一条天皇の勅命で国家鎮護祈祷、功績により天台別院に
長保三年	美濃国神名帳に「正四位下小白山明神（白山中宮長滝寺）」がみられる
寛仁年間	権大納言藤原能信により『白山大鏡第二神代巻初一』が著される
寛治八年	長滝寺、飛騨国目代・藤原依塙から大野郡焼野の寄進を受ける
保安元年	白山中居神社の年中行事が記された『越宗廟白山上下年中行事祭祀巻』が著される
大治元年	この年から南宋湖州において宋版一切経恩渓版が開版される（長瀧寺の「宋版一切経」（国重文）もこれに属す）
元暦二年	藤原秀衡の家臣・桜井平四良正喜と上杉武右衛門宗庸、石徹白へ到着し、上下の神殿を建立、上下の尊像を祀る
文治三年	源義経、奥州藤原秀衡のもとに逃れる
文永八年	白山本地中宮長滝寺、堂舎一四宇が火災にかかる
正安四年	伝灯大法師覚海、石灯籠（国重文）を白山中宮長滝寺に寄進
正和元年	古瀬戸黄釉瓶子（国重文）白山中宮長滝寺に施入される
正和三年	仏鉢鉢（国重文）が白山中宮長滝寺に寄進される（元亨三年、延文二年にも寄進を受ける）
建武三年	足利尊氏、長滝寺に祈願
応安六年	長滝寺、延暦寺政所下文を賜わる
応永二九年	室町幕府将軍・足利義持、長滝寺領河上荘の課役を免ず
長禄元年	室町幕府管領・細川勝元、長滝寺に執達
永正四年	美濃国守護代・斎藤利綱、上保の管理権を長滝寺に任せる
天文九年	今川義元、石徹白林阿弥に「石徹白において殿河遠江の道者の宿坊前々の通り」と安堵状を出す
永禄一〇年	長滝寺阿名院・神澄、井ノ口で織田信長と対面し制札を受ける
元亀二年	織田信長、石徹白・白山別山権現に鍔口を寄進
天正一四年	金森長近、白山禅定別山大行事権現社殿造立
天正一六年	秀吉の武具さらいにより、長滝寺武具供出
文禄元年	郡上藩主・稲葉貞通、長滝寺に滞在し、連歌の会を催す（後日、寺地寄進）
文禄四年	長滝寺、未曾有の衰微

参考文献

（１）白山山麓　石徹白郷シリーズ⑬
いとしろ白山御師資料集
平成２９年編集　上村俊邦氏編集

（２）郡上学
白山信仰と白山文化
平成２３年郡上市発行

（３）白山文化手帖～白山文化とは何か～
岐阜県博物館協会発行

（４）岐阜女子大学デジタルアーカイブ研究所
郡上白山文化遺産デジタルアーカイブ／石徹白
石徹白　｜　地域資源デジタルアーカイブによる知の拠点形成のための基盤整備事業(digitalarchiveproject.jp)